
ライダーの世界がもしも一つだったら ~ライダーワールド~

sinne-キヨノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライダーの世界がもしも一つだったら〜ライダーワールド〜

【Nコード】

N8328Y

【作者名】

sinne - キヨノリ

【あらすじ】

もしも全てのライダーの世界が一つだったら・・・。そんな作者の想像から生まれた小説です。主人公は誰がどう言おうと剣立カズマと辰巳シンジとかリイマジ。オリジの出番はリイマジと比べると少ないかもです。完全ギャグです。キャラ崩壊も含みます。結構ありがちな設定とかが出ますが気にしないで下さい。

一話「カズマのストレス：鈴海姉弟の恐怖」(前書き)

カズマ「で、新小説始まったけど・・・」

一真「どうしたんだ？」

カズマ「俺が最初から・・・」

一真「ま、それは見てのお楽しみだ」

ララ「なんか似たような小説あるかもしれないけど、これはもう本当に作者の妄想だからね」

弟切「・・・」

一話「カズマのストレス：鈴木姉弟の恐怖」

彼は、其処に立っていた。

「はあ……。今日も遅刻かあ……」

青年、剣立カズマは溜息をついていた。

彼はBOARDという会社の社長（代理）。

最近夜が眠れないらしく、遅刻しがちである。

「カズマ。お前今日も遅刻か……」

カズマの先輩である菱形サクヤは言った。

「最近アイツらが煩くて眠れないんだよ」

「大丈夫か？」

「まあ、ね」

サクヤはカズマを心配している。

「お前は一応社長代理なんだぞ。ちゃんと健康管理とかしろよな」

「はいはい……。はあ……」

彼はサクヤに言われながらも、溜息をついていた。それは、彼が住んでいる所の隣部屋の人物のせいなのだが……。その人物は、カズマの真後ろに居た。

「うえあつ！」

「おはようございますカズマさん！今日はソウジさんが社会科見学として僕とアスムを連れてきてくれたんです！」

「すみませんカズマさん。でも楽しそうだったので、昨日は眠れなかったんです」

「よ、カズマ」

ワタルとアスムとソウジ。

ソウジは実家に住んでるので原因にはなっていないのだが、この子供二人。アスムとワタルが昨日色々どんちゃん騒ぎをしていて眠れなかったのである。

「お〜ま〜え〜ら〜」

「まあまあ、怒らなくて良いだろう。実際、二人は今日を楽しみにしてたんだからな」

ちなみに、見学予約はしつかりとつてある。だからこそ、カズマは余計イラついている。

「カズマ、アンデッドがでてK「剣崎さんとムツキ行かせろ、俺は社会科見学してる子供達の相手をしなくちゃならない」

「カズマ落ち着け！」

「俺は此処の社員じゃないぞ！」

サクヤの言葉にカズマは八つ当たりするように言う。
ちなみに、ムツキはともかく、剣崎はBOARDに入り浸ってはいるし、プレイバックルはもっているが、BOARDの社員では無い為、ただとばつちりをくらっているだけだ。

「じゃ、ソウジさん、この二人の子守は俺がしとくんで、ソウジさんはZECT見に行ってください。天道さんが何やらかすか分かりませんし、弟切さんは弟切さんで貴方に誤解される事しそうですし、加賀美さんは加賀美さんで熱くなりすぎて色々ありますし。アラタさんも加賀美さんと一緒になってやらかしそうですし、行った方が良いと思いますよ」

カズマがZECTの心配をするも

「いや、俺も実はBOARDの中を見てみたかったんだ。まあ、あつちは天道と弟切に任せるからな。変な事やらかしたらアイツに制裁くらわせるつもりだしな」

「アイツって……。もしかして、鈴海ルルですか？それとも姉の方ですか？」

ソウジは笑っていった。

「どっちもだ」

「それは逆らえないですね……」

カズマは苦笑いする。

所変わってこちらは鳴海探偵事務所。

左翔太郎と園崎来人ことフィリップが事件の話をしていた。

「翔太郎、今日も事件だよ」

「何だ？今度は」

フィリップは言う。

「何だか、不審者っていうか、変な人が出るらしい。発見者の証言によれば、その人の顔は恐怖するほど恐ろしいらしい」

「誰だ？」

「うーん、証言によると、男性で、青い服を着ていて、青いバイクで……」

「分かった……。剣立カズマだろ。アイツは、最近溜まってるらしいからな」

「今日も、とばっちりで剣崎さんとムツキがアンデッドの封印に行かされたって」

「おいおい、ムツキはともかく剣崎は社員じゃないだろう……」

「顔出してるしライダーになれるからって理由でらしい……」

「はあ……」

そのカズマの行動には、翔太郎も呆れていた。

喫茶店兼宿泊場所のマリンチェリアには、鈴海ララとルルが居る。

「で、ソウジさんにストッパー頼まれたの？そのまま」

「うん・・・断りきれなくて・・・」

「まあ、良いけど。じゃ、ZECTに行くよ」

「うん」

二人は、ZECTに行く事にした。

＼ZECT＼

「てわけで、ソウジさんに頼まれて、何かやらかしたら私達が制裁を下します」

ララは弟切ソウと天道総司と加賀美新とアラタに言っていた。
超絶の笑顔で。

「あ、ああ・・・」

弟切ソウはソウジに擬態したワームだ。

ララの使えそうだから生かしておいてという言葉だけで生きれているワームだ。

ララの言葉の力は多大で、ララに逆らうとまずい事があるという噂がある。
なので、弟切ソウはララに逆らえない。勿論、他の加賀美、天道などもだ。

「何かやらかしたら私の権限で弟切さんの命は無いと思ってください」

その笑顔は超怖い。ちなみに、彼女に悪気は無い。大事な事だからもう一度言う、先ほどの彼女の言葉に悪気は無い。
天然Sなのだ。
なので、逆に弟切や天道は恐れている。

一体、これからこの世界で何が起ころのだろうか……？

続く

「話」「カズマのストレス：鈴海姉弟の恐怖」（後書き）

ララ「あとがきは作者との対談！」

作者「はい」

ソウジ「鈴海最強伝説・・・」

作者「ララに質問！」

ララ「何？」

作者「ララって、皆の事どう呼んでるの？」

カズマ「作者なら其処分かれよ！」

ララ「えっと・・・」

ユウスケ ユウスケ君

ワタル ワタル君

シンジ シンジ君

カズマ カズマ君

タクミ タクミ君

ショウイチ ショウイチさん

ソウジ ソウジさん

アスム アスム君

五代 五代さん

津上 津上さん

真司 城戸君

乾巧 巧さん

剣崎 剣崎さん

ヒビキ ヒビキさん

天道 総司君

野上 良太郎君

紅渡 渡さん

士 士君

左翔太郎 翔太郎君

フィリップ フィリップ君

映司 映司君

弦太朗 弦太朗君

だよ！」

カズマ「長い説明有難う！」

「二話」映司の苦勞・子供達（+ソウジ）の社会科見学（前書き）

映司「二話で早速僕の身に何が……」

カズマ「さあ？」

タクミ「はあ……」

アスム「今回は師匠出してくださいよ……」

ララ「今回は無理かも……」

二話「映司の苦勞・子供達（+ソウジ）の社会科学見学

子供二人と三十路は上機嫌だった。
ずっと気になっていたのだろう。

BOARDの中身が。

「
」

「子供達はともかく、ソウジさんは上機嫌にならないでください、
なんだか三十路の人がそんなことしていると正直引きます。え〜っと、
こっちは情報管理室です。アンデッドについての情報がびっしり
詰まっていたりするので、あまりこの中に人は入れないです」

「アスム！見てください！パソコンが沢山あります！」

「パソコン・・・ですか・・・？」　あまり機械には慣れていない

「ふむ」

「で、こっちは訓練室です。まあ、特にムツキとか剣崎さんとか色
々な人が入り浸っています」

訓練室にカズマが案内した、その行動が、駄目だったのかもしれな
い。

「カズマさん！訓練ですか！？少しやらせてください！」

と、アスムがこんな事を言い出したのだ。

「え？」

カズマは驚いた。鬼の修行をしてるとはいえ、こんな子供が大人のやるような訓練をするのは・・・と思ったのだ。

「大人と同じプログラムにしてください！」

「ぼ・・・僕は遠慮します・・・」

「俺は・・・少しやってみようか」

という事で、何故か丁度悪いタイミングで帰ってきてしまった剣崎を巻き込んで、カズマもやる事になってしまった。

「え〜っと、じゃあ、かる〜く説明します。まず、模擬戦をします」

「「どんだけリアルな訓練なんですか!?!」」

アスムと見物者のワタルが言った。

「なら、やらなくていいんだけど、アスム」

「でもやります!」

「えっと、この機械の中に入ってやります。この機械は総て連動してるので、まあ、丁度俺と剣崎さんとアスムとソウジさんで四人だから二対二で出来るね。剣崎さん」

物凄い笑顔でカズマが剣崎に言った。

剣崎は

(コイツ絶対それ分かってて引き止めたな……!)
と思っていた。

ちなみに、チーム分けは
アスム・ソウジ：カズマ・一真
になった。

「準備はいいですか？じゃあ、レディ……ファイツ！」

「……… 実況兼審判はワタル、解説は俺、相川始でやらせても
らう」

『おい！』

意外な人物、始が居た事に剣崎は突っ込む。

「黙れケンジャキ」

*ちなみに作者は始さんの性格分かってません

『というか、もう戦闘は始まっていますよ！』

「おーっと！余所見をしている剣崎さんにアスムが特攻を仕掛けて
きます！が！」

『うええええええええええ！』

『剣崎さん！危ない！』

「おーっとカズマさんが剣崎さんを助けに入った！解説の相川始さ
ん、これは一体どういう事でしょうか？」

「……………第三のジョーカー候補だな、アイツ」

「ちゃんと解説してください！」

*ちなみにこの小説では剣崎さんはジョーカー。相川さんもジョーカーという設定です。

『俺は人間だあああああああああああああああああああああ！
！！絶対にジョーカーにはならないからなあああああああああ
ああああああああああああああああああ！！！！！！』

ちなみに、カズマは全力で否定していたが。

『ふ、剣崎、隙あり！』

『うえいうえあ！！??』

「おっと！此処で今まで何もしていなかったソウジさんが剣崎さんに特攻していきました！」

『っていつか今の声は何だよ！』

「戦っていても全力で突っ込みをするカズマさん！解説の相川さん、これはそういう事でしょうか？」

「……………突っ込みとしての本能。体にしみこんでいるのか……………」

「何ですかその言い方!?!」

『つていつか社会科見学は何処行った!』

『そんなのはもう宇宙の彼方に行きました!』

「アスムは少し自重してください!」

「……………(アイツ、本当にジョーカーに出来るな……………)」

ちなみに、カズマは何やかんやで剣崎さん守ってます。

「翔太郎」

「何だ?フィリップ」

フィリップは、相棒の翔太郎に言った。

「映司が、翔太郎に相談したい事があるって」

「……………はあ……………」

「どうしたんだ?映司」

「ああ……………聞いてくれよ……………」

「あ、ああ……………。まあ、とりあえず座れよ」

翔太郎は映司を椅子に座らせる。

「で、何だ？映司」

「あ、ああ……。実はな……」

映司は一息ついていった。

「アंकが夜中ずっと煩くて寝れないんだ。そして、外に出たかと思つと、ヘマをするガメル、ウヴァ、カザリ、メズールに毎回出会つてフォローして、アंकがアイスアイスうるさくて、拳句の果てに飛ばされてきた弟切さんにぶつかつて……」

「……。。よし、ララの所に泊めてもらえ、あそこなら安全だしな」

「アंकには、僕たちから言っておくよ」

「うん……頼む……」

続く

二話「映司の苦勞・子供達（+ソウジ）の社会科見学（後書き）」

意外に社会科見学の話が・・・。

飛ばされてきた弟切・・・。多分ララに飛ばされたんだと思います。何かへマして。それかソウジさんにやられたか、加賀美に巻き込まれたか、天道に振り回されたか。

では、また次回お会いしましょう！

三話「社会科見学終了：天道総司対鈴木ルル（前書き）」

カズマ「社会科見学に結構時間使ってるよな・・・」

ユウスケ「・・・」

ルル「それにしても、まだあまりコツチの様子が出てないな・・・」
ララ「だから今回でるんだよ！」

三話「社会科見学終了：天道総司対鈴海ルル

「えっと……。じゃあ、次は……」

「僕、社員食堂に行ってみたいです！」

カズマの言葉を遮ってワタルが言った。

「へ？何で？」

「だって、どんなところか見てみたいんですよ！」

「あ、僕も見たいです！それに、土さんと師匠がはじめてあった場所ですし！」

「は……はあ……。ソウジさん、剣崎さん。其処で良いですか？」

「ああ」

「良いけど……。てか俺も一緒に行く前提なのかよ！」

何気に巻き込まれてる剣崎はともかく……。一行は社員食堂に行く事となった。

「……ドンマイ、剣崎さん」

「……頑張れよ、剣崎」

「うん・・・あり・・・が・・・と・・・」

「おい、おきろー！おーきーろっ！」

ボタン。

映司はついに倒れた。

ちなみに、ララとルルがその場を離れた為、サボっていたら制裁するという条件付きで各自仕事をする事となった。

一方、BOARDでは、意味不明の料理対決が始まっていた。
それまでの経緯は・・・。

『お、ソウジ』

『ん、津上か、何故お前が此処に居る？』

『ああ、実は、何回か此処で見てるんだよ。社員食堂の料理とか色々』

『成る程な』

『で、ソウジ。お前におでん対決を申し込みたいんだ』

『ああ、いいが』

という事で、おでん対決・・・もとい、料理対決が始まったのであった。

「俺達を無視して話を進めるな――！！！！！」

カズマの渾身の突込みが入る。

「まあ、良いじゃないですか。僕達も丁度お腹が空いてきた頃ですし」

「はあ・・・分かったよ」

「よし、行くぞ、ソウジ」

「何処からでも掛かって来い」

「よーいつスタート！」

そして、数十分後

「はい、これが俺のおでんだ」

「天堂屋の伝統のおでんだ。具が少ないとか言つなよ」

（色々すつとかばして結果発表）

「で、結果は？」

「……………ソウジさんの」「」 ソウジからの気迫が凄
かった

「はあ……なあ、もう帰って良いか？気付いたらもう帰る時間な
んだが……」

「あ、確かにそうですね。僕たちもう帰ります」

そして、社会科見学は終わったのだ。
最も、数人は被害にあったようだが。

「……………広瀬さん」

「どうしたの？剣崎君」

「……………俺、疲れました……」

「……………」

「あ、カズマ君、アスム君、ワタル君。お帰り〜。で、ごめんけど、
今夜はあまり騒がないでね」

「何ですか？」

「今日は、映司君を泊めてるの。だ〜いぶつかれてるようだったか
ら、静かにしてね」

「……………はい」

続
く

三話「社会科見学終了：天道総司対鈴海ルル（後書き）」

ララ「ちなみに、カズマ君達三人は私の家に泊まってるの」「
ルル「カズマが保護者代わりなんだってさ」
カズマ「あと一人泊まってるの。まあ、言わないけど、まだ」
ララ「じゃ、時間が無いからさいなら」

四話「シンジの出勤：W龍騎の恐怖（前書き）」

シンジ「サブタイトル考えた奴ぼこる」

真司「……………」

リュウガ「……………」

*本作品にはリュウガも登場するっぽいですが（作者はリュウガについて大して知識はないです||無謀）

四話「シンジの出勤：W龍騎の恐怖」

「遅れるー！！！！！！」

青年、辰巳シンジは、急いで出勤していた。

彼はバイクを持っていない為、無論、全力疾走だ。

「あゝもう！あいつら騒ぐなって言われてたのにまた騒いで！あの三人怒らせたら後が無いって分かってるだろ！」

「シンジ〜」

「カズマ！」

全力疾走するシンジの横を、ブルースペイダーに乗ったカズマが通りかかる。

「今かまってる暇は無いんだ！僕は行くからな！」

「なら、俺が連れてってやるよ」

「いいのか！？」

「ああ、幼馴染のよしみとしてな」

*この小説ではリイマジ組は年齢が近い人たちは大体幼馴染という設定です。

例えばシヨウイチとソウジ。カズマとシンジとユウスケとタクミ。アスムとワタルとタクミ。

タクミの名前が二つ拳がつてる理由はいいません。

「じゃ、ありがたく！」

そして、シンジはカズマに乗せて行って貰った。

此処はATASHIジャーナル。辰巳シンジの働いてる場所である。

「レ〜ンさ〜ん！遅れてすみません！」

「ああ、シンジか」

彼は羽黒レン。辰巳シンジのパートナーである。

「からそこ、ホモとか言うんじゃない、ヤンデレとか言うんじゃない。

「どうしたんだ？遅れるなんてお前らしくないな。ま、行くぞ」

「はい！」

「は〜、今日は休みか〜」

こちらは城戸真司。辰巳シンジとはとても仲が良い。

城戸真司はOREジャーナルというところで働いてる、だが、今日は特別休暇を貰って暇にしている。

現在、ブラブラとしている。

「あ、城戸さん」

「あ、えっと……。シンジの幼馴染の一人の……」

「小野寺ユウスケです」

「あ、そうそう。で、どうしたんですか？」

*ちなみに作者は龍騎未視聴の為、城戸さんの性格これで良いのか
分かりません……。

「いえ、なんでもありません。見かけただけなので」

「あ……はあ……」

そう言ってユウスケは去って行ってしまった。

「一体、なんだったんだろう……」

「ふゝ、今日も取材終わった」

「シンジ」

「あ、何ですか？レンさん」

「今日はもう帰って良いぞ。城戸は今日特別休暇で暇してるからな、
相手してやれ」

「はい」

「きどきさん」

遠くから辰巳シンジが走ってくる。

「あ、シンジ。どうしたんだ？」

「レンさんが城戸さんが暇してるから相手してやれって」

「へえ・・・」

「うん。そうだ。マリンチェリア行きますか？」

「え、ララちゃん達に迷惑じゃないかな・・・？」

城戸はそう思いながらも、辰巳シンジに連れられてマリンチェリアに来た。

「あ、シンジ君おかえり」

「城戸・・・いらっしやい・・・」

「相変わらずルル君は無愛想だな」

城戸は苦笑いしつつ席に着く。

「あれ？いつも居るアスム君とワタル君は？」

続
く

四話「シンジの出勤：W龍騎の恐怖（後書き）」

ララ「映司君の受難？」

ルル「映司が怒るのも仕方ない」

映司「何あれ龍騎怖い龍騎が怖すぎてどうしようもない・・・」
「ブツブツ」

五話「仮面ライダーの活用性：二つの学校」（前書き）

ララ「前回できなかつた関係図です・・・」
ルル「超脇役とかはまた今度」

リイマジ

小野寺ユウスケ

友達・・・五代雄介・城戸真司・剣崎一真・門矢士・ワタル・辰巳シンジ・剣立カズマ・尾上タクミ・アスム・如月弦太郎

ワタル

友達・・・紅渡・左翔太郎・小野寺ユウスケ・アスム・尾上タクミ

辰巳シンジ

友達・・・城戸真司・乾巧・剣崎一真・野上良太郎・小野寺ユウスケ・剣立カズマ・尾上タクミ・如月弦太郎・鈴海ララ・鈴海ルル

剣立カズマ

友達・・・城戸真司・乾巧・剣崎一真・野上良太郎・紅渡・小野寺ユウスケ・辰巳シンジ・尾上タクミ・門矢士・如月弦太郎・鈴海ララ・鈴海ルル

尾上タクミ

友達・・・乾巧・安達明日夢・野上良太郎・野上幸太郎・如月弦太
朗・鈴海ララ・鈴海ルル

芦河シヨウイチ

友達・・・五代雄介・津上翔一・ヒビキ・天道総司・ソウジ

ソウジ

友達・・・五代雄介・津上翔一・ヒビキ・天道総司・芦河シヨウイチ

アスム

友達・・・安達明日夢・小野寺ユウスケ・ワタル・左翔太郎

*海東は師匠

五話「仮面ライダーの活用性：二つの学校」

こちら辺には、高校が二つある。

青色の制服の天ノ川学園高校。通称天高。

灰色の制服のスマートブレイン高校。通称……何だっけ？。

まあ、とりあえず、この二つの高校は、もう合併しろよ、って言うくらいに仲が良い高校。

この人達もまた、結構仲が良いのである……。

「タクミー！よ！」

「あ、弦太郎君」

如月弦太郎と尾上タクミ。この二人は、同じ仮面ライダーといふとか色々で仲良くなった二人組である。

「弦太郎君、どうしたの？」

「いや、ちと、手伝って欲しい事があるんだ」

「？」

弦太郎に言われるまま、タクミは弦太郎についていった。

そして、タクミが着いた場所は……。

「で、何なの？皆集まってるけど……」

皆集まってる・・・とは、平成ライダーの面々（＋）が集まっているのだ。

「あ、タクミ」

「カズマさん、これ、何ですか？」

「これはな、平成ライダー（＋）で仮面ライダーの活用性について話してるんだ」

「で、タクミが555をどのように活用してるか聞きたくて、つい俺が連れてきちゃったんだ」

「はあ・・・。555をそんな風に使っわけ無いじゃん・・・」

（でも、555のファイズエッジって、結構警棒に使ってベタなネタがあるんだよね・・・。僕はしないけど・・・）

そんなことを思いながら、タクミは、弦太朗の方を見て言う。

「そういえば、弦太朗君は、フォーゼを何に使った事があるの？戦い以外で」

「俺は・・・特に、無いな」

「でしょ？そうそう、あまり使わないって・・・」

タクミがそう思っているとユウスケたちが話してる辺りでこんな会話を聞いてしまった。

「ユウスケはさ、クウガ何に使った事がある？」

カズマが、ユウスケに聞いた。

「ん〜、俺は、あねさんに格好つけようと、クウガに変身してバイクで出勤した事がある。すぐ怒られたけど」

「何だその馬鹿な使い方！」

「そういうカズマも、馬鹿な事に使ってるんじゃないかな〜」

カズマの言葉に、シンジが訊く。

「俺は……無いな」

「え〜、ベタなブレイザーで料理作るとか無いのかよ〜」

「シンジだって、何か使ってるのかよ」

「う〜ん、僕は……」

その後、馬鹿馬鹿し過ぎる返答が返って来た。

「レンさんの居る場所に行く為に龍騎に変身してミラーワールド入ってレンさんの居る場所の近くの鏡に移動した事がある。城戸さんに会う時も同じような事使ったことがある」

「……シンジ……」

「それは・・・無いな・・・」

「ユウスケさんも、シンジさんも馬鹿馬鹿しすぎますよ・・・」

「あ、タクミ」

我慢の限界だったのか。突っ込まずに入られなかったのか、タクミは会話に割って入っていた。

「タクミは・・・さつき無いつて言ってたか、ツマンネ」

「もし使ったとしてもシンジさんとかユウスケさんとかと同じようには使いませんよ・・・。それに、移動とかならオートバジンがありますし」

「良いよね」。三人はバイクあつて・・・」

「あ・・・」

そうだ、ディケイド本編で、ユウスケ、カズマ、タクミには、ちゃんとバイクがあるという描写があつたのだ。

でも、それ以外のリイマジには、バイクがあるという描写は無かつた。

まあ、子供二名は仕方ないが。

「二号ライダー的存在である海東にバイクが無いのに、この三人にはちゃんとして、バイクがあるよね」

「やめて・・・やめてくれ！シンジ！カズマ、シンジを止めてくれ！このままだとバイクが無いというだけで地獄兄弟の仲間になって

しまっ!」

「それだけは嫌だ!」

「何やってるんですか・・・ばかばかしい・・・」

子供のワタルにまで、こんな事を言われる始末だった。

(どうしよう・・・僕も、実は料理する時にザンバットソード使っ
たんだよね・・・)

(それ・・・ワタルもベタですね・・・。ちなみに、僕は音撃棒で
普通に太鼓演奏しましたよ)

(それ・・・普通の使い方だね・・・)

ちなみに、上から順にワタル、アスム、タクミである。

つづく

五話「仮面ライダーの活用性：二つの学校」（後書き）

ララ「オリジの人たちです」

オリジ

五代雄介

友達・・・津上翔一・ヒビキ・小野寺ユウスケ・芦河シヨウイチ・
ソウジ・フィリップ

津上翔一

友達・・・五代雄介・ヒビキ・天道総司・芦河シヨウイチ・ソウジ

城戸真司

友達・・・乾巧・剣崎一真・小野寺ユウスケ・辰巳シンジ・剣立カ
ズマ・左翔太郎・火野映司

乾巧

友達・・・城戸真司・剣崎一真・野上良太郎ほっとけないらしい・紅渡・尾上タクミ・
辰巳シンジ・剣立カズマ・フィリップ（いつのまにかつるんでた）

剣崎一真

友達・・・城戸真司・乾巧・紅渡・門矢士（友達と言うより会う度
喧嘩してる）・小野寺ユウスケ・辰巳シンジ・剣立カズマ・左翔太郎

ヒビキ

友達・・・五代雄介・津上翔一・相川始（何でだろう・・・？）・
芦河シヨウイチ（こちらそこ、映画で共演してたとか言うんじゃない、
キラメキとか言うじゃない）・ソウジ

安達明日夢

友達・・・アスム・アスム・尾上タクミ・如月弦太郎

天道総司

友達・・・津上翔一・野上良太郎（何故・・・）・門矢士（妹居る
同士、仲良くな）・ソウジ・芦河シヨウイチ・フィリップ（友達と
言うより付き纏われている）・鈴海ララ

野上良太郎

友達・・・乾巧・天道総司・紅渡・剣立カズマ・辰巳シンジ・尾上
タクミ・火野映司・如月弦太郎

紅渡

友達・・・乾巧・剣崎一真・野上良太郎・ワタル・剣立カズマ・門
矢士（会う度喧嘩してる）・フィリップ・火野映司

門矢士

友達・・・剣崎一真・天道総司・紅渡・小野寺ユウスケ・剣立カズ

マ・左翔太郎

左翔太郎

友達・・・城戸真司・剣崎一真・門矢士・アスム・ワタル（なつかれてた）・フィリップ・火野映司・如月弦太郎

フィリップ

友達・・・五代雄介・乾巧・天道総司・紅渡・左翔太郎・火野映司・後藤さん

火野映司

友達・・・城戸真司・野上良太郎・紅渡・左翔太郎・フィリップ・如月弦太郎

如月弦太郎

友達・・・安達明日夢・野上良太郎・剣立カズマ・辰巳シンジ・尾上タクミ・小野寺ユウスケ・火野映司

「ララ」です！」

六話「カズマの暴走：それ違う番組（前書き）」

ララ「・・・」

士「大体分かった。風m「はいネタバレ禁止！」

カズマ

六話「カズマの暴走：それ違う番組

「はあ……」

「……どう……したの……？ララ……」

溜息をつくララに、たずねるルル。

「ああ、何か、酒、呑みたいなあ……って」

「……」

突然のララの言葉に、ルルは何が分からなかった。

「てわけで！飲み会しよう！」

「……突然過ぎるわ……」

ララの言葉にユウスケ、カズマ、タクミ、巧が突っ込む。

「会場は此处。マリンチェリア！てか今からはじめる！」

「……自重しろおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおお……」

自重しないララに、先程の四人が突っ込む。

「でも、まあ、良いんじゃないかね？僕も最近やりたかったし、リイマジとオリジ集まって」

辰巳シンジが言った。

「シンジ君ノリ良い！よし、じゃあやるうそっしょっしょー！」

と言う事で、強引な飲み会が始まったのである。

「で、僕達未成年組はジュースですか」

「あれ？ララさんはこっじゃないんですか？」

「ふえ？えっと・・・私、お酒のみたいになっつて」

*未成年の飲酒は禁止されています

「駄目駄目！ララちゃんは未成年でしょ」

カズマがララをタクミ達の所へ連れ戻す。

「あ・・・」

その時、ユウスケは違和感と微妙に慣れた気配を感じた。

「まったく、あ、ユウスケ君。一緒に飲もう」

「はあ!？」

カズマが、完全に酔っている。

「お前酔うのお前昔からだけど早っ!」

「ほらほら、ユウスケ君もモタモタしてたらなくなるよ」

というか、カズマは少々麗羅化している……。

「カズマさん、一体どうしたんですか?」

「どうもしてないよ」

「いやいやいや……どうかしてるって!」

「ああ?」 某三蔵の様な低い声で言う

「「「今度はそれかよ!!!!」」」

先程の四人からカズマを引いた三人が言う。

「大体分かった。カズマは酔うと中の人の他のキャラになるんだ!」

士が今までのカズマの行動で分かった事を言う。

「確かに……最もですね……」

タクミが士の言葉に同意する。

「っというか……何処から……あの声……出して……る

「んだろっ・・・」

ルルが、先程のカズマの行動で疑問に思った事を口に出していた。

「ん〜？あれ、えっと・・・昨日・・・何があったんっただっけ？」

「あ、カズマ君、起きた？」

「あ、ララ。えっと、昨日何があったんだっけな」

「昨日は此処で飲み会したよ？その時にカズマ君が暴走して・・・」

「あ〜！」

カズマは思い出したように言う。

「俺・・・実は酔うと何か性格変わるって言ってなかった・・・」

「？」

ルルは疑問符を頭に浮かべている。

「何かさ、シンジとユウスケに聞いたんだけど、俺昔から酔うと何か、性格がコロコロ変わるって言われてんだよ」

「・・・成る程な・・・」

（っっていうか、中の人の別の仕事とか、そういうのだけど・・・）

「ふああ〜。う〜、まだ眠いな〜」

ララは、眠たそうに欠伸する。

「うわあっ!」

「・・・!?!」

「どうしたの?カズマ君」

「何か炎出せた!」

「それ別の番組!」

六話「カズマの暴走：それ違う番組（後書き）」

ララ「今回の話は作者が風魔の小次郎見てやりたくなかったネタです」
カズマ「最後の小ネタはパツと思いついたものだからな」
ルル「……パツとすぎ……」

七話「カズマ大暴走・シンジはストッパー？」（前書き）

ララ「・・・暴走から、大暴走になったね」

ルル「・・・今回は・・・いろいろな意味で・・・暴走する・・・らしい・・・」

七話「カズマ大暴走：シンジはストッパー？」

事件は、その朝、起こってしまった。

「うわああああああ！！！！」

「止まってカズマ君！！！！」

「カズマ、お前いい加減やめろ！」

「やめろって言われたって！」

此処はマリランチエリア。

いつもなら、此処で全員朝食を食べている、が。現在カズマが暴走して、それ所ではないのだ。

『はあ・・・昨日のアレは、これの前兆だったのか・・・』

丁度アクアのホログラムを出していたらしく、アクアがそう呟く。

「うん、だね・・・。まあ、良いんじゃない？」

「。。。良くない（です）！！！！」

シンジ、ユウスケ（たまたま来ていた）、アスム、ワタルが叫ぶ。

ちなみに、カズマがどう暴走しているかと言うと・・・炎を出しまくっている。

手を少し振っただけで周りに火が移る。

「危ないだろうっ！」

「シヨウイチさんてんぱり過ぎてさっきと言ってること違うっ！」

てんぱっているシヨウイチにタクミが突っ込みを入れる。

というより、シンジの怪力には誰も言わないのだろうか……？

「シンジっ！！ルルっ！！」 炎に包まれている

「……カズマ……！！」 カズマに抱きつきに行く

「カズマお前ルルから離れろ！ルル！お前もカズマに抱きつくな！お前も燃えるだろ！」

シヨウイチがまたもや突っ込む。

今回はどうやらシヨウイチが全面突込みらしい

「今さらだろ！」

「シヨウイチさん何処に話してるの!？」

タクミはシヨウイチが時々ボケた時の突っ込みか……。

「どけっ！！！！！」

「!？」

其処には、仮面ライダーフォーゼファイヤースティツが居た。

「……弦太郎……？」

「俺がその炎消してやるぜ！」

そう言つて弦太郎は水を発射した。

無事、炎は消し止められたとさ。

続く

七話「カズマ大暴走：シンジはストッパー？」（後書き）

ソウジ「前回に続いて麗羅ネタか」

シヨウイチ「はあ・・・疲れた・・・」

ソウジ「そんな事で疲れていると、年寄りに見えるぞ」

シヨウイチ「年寄りで良いさ、俺の中の人の年齢考える」

ソウジ「・・・」

八話「カズマは人間？：ララの天然ぶり」

「唐突だが、オリジ、リイマジがどれくらい人間なのか、人外なのか、検証してみよう」

そう言ったのは、意外にも天道だった。

「いきなり・・・どうしたんだ？しかも、何故ZECTでやる必要が・・・」

加賀美は天道の唐突な言葉に動揺する。

「はーい！司会は私、鈴海ララと！」

「鈴海ルルで送る」

「何二人なじんでるの！？」

シンジはララ達に突っ込む。

ちなみに、現在の状況はZECTにオリジ・リイマジ等のライダーが集まっている。

「じゃ、まずはクウガのお二人から！」

ララはそう言って、五代とユウスケを指す。
五代とユウスケは、自分達の事について話す。

「えーっと、俺達は・・・」

「まあ、人間ですね」

「ベルトの力で色々あるけど」

最後に二人は付け足した。

「確かに、そうだよね。じゃ、次アギト」

「あっさりしすぎだろ!!」

ララは納得しながらも、アギトの二人、津上とシヨウイチを指差す。シンジに突っ込まれてるのは完全無視だ。

「……」 作者がアギトについて無知なので何もいえない

「……」 DCD本編は見てるけど津上が何も言えないので
言わない

「うーん、まあ、アギトは超能力の使える人って事で、人間か、じ
ゃ、次龍騎」

「だ〜か〜ら〜っ!!」

「まあ、シンジ、あまり怒らなくても……」

「そうだよ、時間の問題とかあるんだから」

怒るシンジを城戸が抑える。

城戸の言葉をララは肯定し、言葉が続けている。

「まあ、結構誰でも使えるようなライダーだよな。龍騎って」

城戸は言う。それは、DCDの設定を見たほうが早い。

「だよな、じゃ、人間」

「人間」

「ふむふむ・・・」

ララは、メモを取っている。

どうやら、今回の事をメモしているらしい。

ルルは、自分の台詞が無いのでタクミとカズマと剣崎と乾と遊んでいた。

「・・・・・・・・」

「ははは・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「タクミ、乾、何だか乾いた笑いしてるぞ・・・大丈夫か？」

「まあ良いじゃん、ルルは結構良い子なんだし」
一番なつかれてる人

「次だよ、タクミ君、乾君」

「はい」

「てか、ファイズについてはもう分かってるだろ。ファイズは普通に人外だ」

「……じゃあ、ブレイドは……どうなんだ……？」

ルルの言葉に、皆考え込む。

「そりゃあ……人間だろ」

士が言う。

「でもさ、ブレイドって、アンデッドと融合して戦ってるんだっけ？」

ユウスケも考え込むように言う。

「え、でも、人間だろ？」

「へ？じゃあ、一部人外？」

全員、しばらくブレイドについて考え込んでいた。

そして、結論

「ブレイドは（多分）一部人外！」

「賛成！！！！」

「「いやいや賛成するな！」「」

ララの言葉に、当人達意外賛成。
その事に当人達は否定してる。

「確かに、剣崎に関しては、完全にアンデッドになってるな」

「始さん、そんな話じゃないです」

始の言葉にタクミは言う。

「……てか……オリジと……リイマジで……違うよ
な……ブレイドって……。僕は……どっちでも……良いけど・
……」

ルルの言葉に全員賛成して、ブレイドの件については保留となった。

「じゃ、次響鬼ですね」

アスムが言う。

「うーん、保留」

「……ええっ!?!?」「……」

シンジの言葉に響鬼の四人……WヒビキとWアスムは驚く。

「だって、作者響鬼に対してあまり知識無いんだもん」

「……orz」「……」

ララの言葉に四人は落ち込む。

「……頑張れ……」

その四人をルルが応援したとかしてないとか。

「じゃ、次カブト……は人間って分かってるね」

「ああ」

「違う、俺は普通ではない、そこらじゅうの人間と一緒にされては困る。俺は、世界の宝だからな」

肯定するソウジに……否定する総司。

初めてオリジとリイマジで意見が違った。

「いやいやいや……異端なのDCDの方！確かにオリジ結構色々してるけど大概料理作って食べて戦ってのローテーションだから！
*作者談」

総司の言葉にカズマは全面的に突っ込む。

それは誰もが納得する言葉だ。

というより、オリジは凄く複雑な過去を背負っている。

リイマジは、それとクロックアップの暴走という事にすると……
リイマジの方が異端と言う事になる。

「っていうか、確かにクロックアップ暴走してる時点でソウジさんの方が異端だね。じゃ、次……は、キバで」

「俺様を飛ばすんじゃねえ!!!」

「モモタロスって言うより・・・僕でしょ・・・」

「・・・特異点・・・。くらいしか・・・異端な所が・・・」

ルルは言う。そもそも、それだけだから、異端な部分。それ以外には不幸くらいしかないから。

「それでも、僕達も、十分分かりきってると思います」

「そうですね、ファンガイアと人間のハーフ」

渡とワタルが言う。

「ちなみに、作者の見解ではリイマジの方がファンガイアの血が濃いのだろうか？と思っている」

「・・・ワタルの・・・方が・・・しっかり・・・してそう・・・」

「・・・orz」

「渡さあああああん！」

「じゃ、あの人はほつといて、ディケイド飛ばして、W！」

「ほつとくな！飛ばすな！そして進めるな！！」

「・・・本当に、シンジが居てくれて・・・助かる・・・」

シンジのララへの全面突っ込み、それは周りにとって有難い事だった。

「っていうか、天道、お前がこれの首謀者だろ、何とかしろよ」

「俺をおいて異端な奴に言われたくない」

「お前が異端にしてるんだろ！」

本編で何回も死んでいる加賀美、そして凄く天才な以外にあまり異端な所が見受けられない総司。

異端なのは加賀美の方であろう。

「でもさ、異端って言ったら、僕も結構異端なんだよね」

「あゝ、確かに、アスムと俺、あとワタルもさ、見方変えたら異端ってことになるよな」

「」「」「」「」

シンジとカズマの言葉は物凄く納得できる。

「僕は未来と過去が入り混じって・・・」

「俺達は一度ライダー大戦の世界で、まあ、色々あった組だ」

「」「ですよ」

「何だか、僕もあの組に入りたいつ！」

八話「カズマは人間？：ララの天然ぶり」(後書き)

最後の言葉はシンジとカズマです。

シンジは良い突っ込みです。

シンジ居ないとルルとかカズマとかララとか止まりません。

カズマもルルのストッパーになるんですがね。

では、次回もお楽しみに。(できません)

九話「ブレイド! :フォーゼとオーズとWの危機」(前書き)

カズマ「・・・題名、適当?」
シンジ「にしか見えないな」

カズマ「そういえばさ」
ルル「?」

カズマ「ブレイド勢オリジの人達って、仮面ライダー系の再出演が多いよな〜あと、ユウスケあたりとの共演」

ララ「確かに・・・剣崎さんはD C Dでそのまんま出演。天音ちゃんも・・・誰だっけ?」

ルル「橘・・・か・・・相川・・・だったと・・・思う・・・」

ララ「あ、そうそう! その人も出てたもんね!、フォーゼ」

ユウスケ「あと、俺の中の人とブレイド勢の人との共演率もそこそこ・・・」

カズマ「あ、あとユウスケと土とか俺とユウスケとか」

ララ「あゝ、何かデジャブな設定でって土君の中の人が出てたもんね W W W W」

ユウスケ「あゝ W」

九話「ブレイド! : フォーゼとオーズとWの危機」

「ブレイイツ! ! ! !」

「……………」

朝からテンションMAXなカズマに、ルルが正直に引いている。

「……………どうしたんだ、カズマ」

「いや、何かさ、適当に」

「今日は、剣崎とかが来るってさ!」

ルルは珍しくうれしそうに言う。

「そうか! 剣崎さんが来るのか! !」

カズマと剣崎は結構仲が良い(というか、リイマジとオリジは大体仲が良い)。

だが、前にもあったように彼がイライラしていると、剣崎はとばかりを食らう。

少しやられキャラになってしまっているのが……まあ、何かあるうが一応彼はアンデッドなので死にはしないが。

ちなみに、以前ムツキのカズマへの悪戯に巻き込まれて封印されかけたとか。

まあ、言わずともカズマと剣崎のタッグには誰も勝てないが。

勝てるとしたらシンジと城戸や、ユウスケと五代などのオリジ×リイマジ組だが。

「じゃ、ルル行こうぜ」

「え、ええ!？」

「剣崎さん!」

「あ、カズマ。よ。ルルも」

「……」

ちなみに、前回もあつたようにルルはカズマ、タクミ、シンジのオリジにも懐いている。

シンジは負のオーラとかのせいで城戸に懐くしかなかったと言う噂もあるが。

まあ、噂は噂なので、何があつたかはわからない。

まあ、ルルの仲良くしている人の親友などにはたいてい懐く。なぜか士には懐かないが。

「今日もルルはご機嫌だな」

「剣崎、今日は何するんだ?」

「えっと……カズマ、BOARDに来てほしいんだが」

「うえあ?まだ出勤時間じゃないけど……何かあつたのか?特にムツキ関連で」

ちなみに、三人は剣崎とカズマのWブレイドが助けていた。

続く

九話「ブレイド! :フォーゼとオーズとWの危機」(後書き)

その後

ララ「ふえ?ギロチン?」

ルル「え・・・翔太郎と映司と弦太郎が危ない目にあっただけど・・・」

ララ「うん、その時、多分アクアと・・・」

ルル「(ブチッ)」

ルルは、その後アクアに説教しましたとき。

ユウスケ「作者談なんだけどさ」

カズマ「うん」

ユウスケ「ルルは・・・とか打とうとするとき、ムツキって変換されるときがあるんだけど・・・」

カズマ「ムツキぶっ殺す」

ユウスケ「いやムツキ関係ないから!」

十話「身体検査：カメラマンの実力」(前書き)

カズマ「題名たぶんシンジ関連」

ルル「上に同じく」

シンジ「ええっ」

十話「身体検査：カメラマンの実力」

「身体検査したい！」

殆どの事の発端の鈴海ララ。

今日も、何か身体検査をしたいと言い出した。

「・・・ララは、いつも何かと・・・トラブルメーカー・・・」

「俺今から出勤」

「僕も」

「僕達は翔太郎さんの所に遊びに行きます」

「ます！」

という、ルル、カズマ、シンジ、ワタル、アスムに言われた。

流石の何をしでかすか分からないザ・スペシャル天然ララの言葉に警戒してるのだろう。が、しかし・・・。

「実は、BOARDの烏丸さんとFLASHジャーナルの桃井さんには許可を得ています。翔太郎君とフィリップ君は旅行中です」

「・・・ ええっ!?!?」「」「」

ララの言葉に四人は驚く。

シンジはルルに向かって言う。

「なあルル・・・お前は裏切らないよな？」

「ルル！」

「お願いします！」

「ルルさん！」

「カズマとシンジが・・・そこまで言うなら・・・」

カズマとシンジ（あと言うならタクミ）に弱いルル。

「じゃあ、レッツ・身体検査！」

そして、身体検査が始まったのだ。

「てか、ララ。烏丸さんに許可得てたなんて・・・一応俺社長なのに・・・orz」

*ちなみに、これでは烏丸さんはBOARDの副社長という設定です。

「桃井さん・・・ついでにレンさんも・・・僕達が地獄に落とされるって分かってるでしょ・・・」

*実はレンさんにも許可得てたみたいです。

「アハハハ・・・アスム、天国が見えます・・・」

「僕には地獄が見えますよ……」

「大丈夫……？四人とも……」

「僕達だって巻き込まれたんですよ……」
弦太郎に連れてこられた

タクミが落ち込んで言う。
「がんばれ、タクミ！」

「タクミ、楽しそうじゃねえか！」

「じゃ、まずは徒競走です！」

「それ運動会！」

「あ、こんな状況でもカズマ突込みするんだ」

なんて、シンジは言っていた。

第一走者……シンジ、カズマ、剣崎、城戸、アスム、安達明日夢、ワタル、紅渡

「一人一般人！一人仮面ライダーじゃない！」

「カズマ……本当に居てくれてありがとう……！」

『じゃあ、一人一人意気込み聞いていくぞ。はあ……がんばれ』
ララに巻き込まれた。

「アクア……。えっと、がんばる！」

シンジはアクアに同情しつつも言う。

「剣崎さんとかキバ二人と安達一緒にさせるな！一般人と人外を一緒に走らせちゃだめだ！」

本当に突っ込みを忘れない突っ込み精神のカズマ。

これが遺言となるかもしれないのに……。と、タクミは思っていた。

「カズマ、これは仕方ないんだ……。烏丸さんに、あと広瀬さんとか虎太郎に……」

という剣崎。烏丸さん……。カズマの件といい、アンタ何してんだよ……。

広瀬さんと虎太郎も……。と、ユウスケはあねさんこと八代藍と休憩所でジュースを飲んでいた。

「何で、俺も……」

城戸……。がんばれ……。僕には……。スーパー天然トラブルメーカーモード発動中のララはとめられない……。と、ルルは城戸にエールを送っていた。

「明日夢さん！がんばりましょう！」

「えっ、ヒビキサあん……」

「頑張れ、少年」

「アンタは自重しろっ!」

「カズマ・・・突っ込みしないで・・・走って・・・!」

「では、次回に続きます」

「ちなみに、さっきの徒競走の結果」

一位Wシンジ、二位剣崎、三位カズマ、アスム、安達（気絶中）四位Wワタル

「順位おかしくない!？」

「てかカメラマン辰巳！龍騎の二人は他のに比べて一般人だろ!」
タクミとユウスケはそれぞれ突っ込んでいた。

「じゃあ、仮面ライダー運動会、次の種目は？」

「ジャジャン、って・・・第二走者は？」

「あ・・・じゃあ、次も、徒競走です」

「じゃあね〜」

「てか運動会・・・ハアハア・・・なって・・・ハアハア・・・!」

「カズマ・・・もう、突っ込み休んで・・・」

ルルは、一日中カズマとシンジの心配をしていた。

続く

十話「身体検査：カメラマンの実力」（後書き）

シンジ「あれ？」

カズマ「作者……」

ララ「まあ、安達君は仕方ないとして……」

シンジ・カズマ・ワタル「……仕方なくない（です）！！！！！！」

十一話「ララはやはりトランプルメーカー・アンデッドの片鱗」(前書き)

シヨウイチ「サブタイトルは、ララとカズマか」

ソウジ「今丁度カズマの中の人が歌ってる歌聴いてるからな」

カズマ「ああ、朱き焰？」

ララ「あれ、シヨウイチさんの言葉には突っ込まないの？」

十一話「ララはやはりトラブルメーカー：アンデッドの片鱗」

「はい！ドキッ！？仮面ライダーだらけの運動会、徒競走の第二走者が行きますよ〜！」

「もう運動会ってなってるのかよ！」

「カズマさん、ナイス突っ込み有難う！」

上から順にララ、カズマ、ルン。

もう運動会と本人も認めているらしい。

「それにしても・・・寒いな〜」

「だな」

と、シンジとユウスケが話していた所。
カズマが来て

「えいつ」 集めていた木を燃やした

「はあっ!?!」

「お前もう麗羅だろ！」

カズマの行動に二人は驚く。

『カズマ・・・お前、人間か？人間だったとしても、忍者か？』

アクアにまで言われる始末。

「俺普通に人間だよ・・・orz」

「じゃ、第二走者発表します!」

第二走者・・・尾上タクミ、乾巧、津上翔一、芦河シヨウイチ、天道総司、ソウジ、小野寺ユウスケ、五代雄介

「僕もう負けましたよ!」

「ったく、何だよ。野上は出ないのかよアイツ」

「じゃ、皆さんの遺言を聞きまゝす!」

「遺言!?!」

タクミが叫び、乾巧は野上良太郎が出ない事に少し落ち込み(?)、ララは問答無用で進め、カズマは突っ込みに惜しんでいた。

「僕は・・・逝きます!」

タクミ・・・それくらい覚悟ないと、これは出来ないぜ。byカズマ

「お前、おおげさじゃないのか?」

ああ・・・乾巧、お前は後で後悔するだろう・・・byシヨウイチ

「え？じゃあ、行きます」

津上さん・・・もう少し危機感持ってくださいb y タクミ

「俺は、絶望という名の終点に立つ！」

ああ、お前は分かってるな、シヨウイチb y シンジ

「俺はこの競争でも一番になる。それが天の道を行く男だからな」

こういう奴が、一番後悔するんだろうなb y ソウジ

「弟切、後で怪我人をゼクトルーパーに頼んで運んで貰え、俺は逝くからな」

分かった・・・ソウジ。あと、逝くな、逝かれたら俺が困るb y 弟切

「あねさん！見ていてください！これが俺の最期です！」

ユウスケ・・・頑張つてb y あねさんこと八代藍

「えくと、頑張らなくちゃ・・・なんだろうな」

五代・・・もう少し覚悟を持て・・・これはそんな一筋縄では終わらない・・・b y ルル

「では・・・よい、スタート！」

パンツ！

「ちなみに、ルンロンが射撃するランチャーが行き交います、二人今コースを挟んで喧嘩中なので」

「……何してるんだお前らあああああああああ！
！……！！」

「ロン……アンタさ、ちゃんと私の言うこと訊きなさいよ！」

「ルンこそ、何してるんだ！いつも小原さんの言う事無視してさ！」

「これが……生き地獄か……」 ランチャーくらいまくってるけどアンデッドなので大丈夫

「剣崎さん、ドンマイですね」 全弾回避

「ララは……なんで全部よけきれの……？」 避けているが多少当たっている

「痛いっ痛いっ！」 だいぶ当たっているが立っている(当たりすぎて倒れられないというのもある)

「カズマ！お前ってキングフォームになってるのか！？」

「なっていないってない！」

「もう、やめよ、何か、飽きちゃった」

「……お前自重しろおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお

十一話「ララはやはりトラブルメーカー：アンデッドの片鱗」(後書き)

カズマ「そういえば、仮面ライダーとある世界の俺達ってさ、最終フォームになれるのか？」

シンジ「うーん、まあ、後でなれるようになるってさ」

ユウスケ「カズマ・・・お前、人間捨てるのか・・・」

カズマ「いやいやいやいや・・・分からないし！まだ！」

ララ「そういえばさ、仮面ライダーとある世界って、マルチエンディングの予定なんだって」

ルル「へえ」

ララ「その中には、物凄いバッドエンドもあるんだって」

ルル「どんな？」

ララ「全員死亡」

ルル「それ・・・ひどい、酷すぎる・・・」

ララ「あと、私だけ死んで他の人は生き残る」

ルル「それも駄目」

ララ「まあ、ちゃんとハッピーエンドもあるから、安心して」

ルル「・・・(ホッ)」

十二話「スキーに行こう! : あの人達も登場!」(前書き)

ララ「こにゃ〜鈴海ララです!」

ルル「鈴海・・・ルル・・・」

ララ「やっと私達のイラストが描けたみたいだよ!」

ルル「でも・・・ピクシブ・・・してないから・・・」

ララ「どっかに投稿するでしょ」

ルル「今回は・・・スキーの話と・・・オリジナルライダー・・・
が・・・登場する予定・・・」

十二話「スキーに行こう! : あの人達も登場!」

「それにしても・・・昨日ってなんだったんだろうなあ・・・」

カズマは途方に暮れるように言う。

カズマが現在居るのはBOARDの社長室。

そして、何故か近くで剣崎、橘、上条、相川がトランプをしていた。ブレイドに出てくるラウズカードの柄のトランプで。

「もう・・・あんなのは懲り懲りだ。俺なんて、あの二人の喧嘩に巻き込まれてアンデッドとはいえ、凄惨数のランチャー受けたんだぞ・・・!」

「そうだったのか、剣崎。アンデッドっていうのも、きついんだな・・・」

「ドンマイです・・・」

「俺は、その時天音ちゃんと居たな・・・。で、途中で天ノ川高校の人達が来たんだが・・・何だか橘と天音ちゃんに似た人が居たな・・・」

始さん・・・それ、中の人ネタです・・・。と、カズマは仕事しながら思った。

「カズマ、お前もトランプしないか?」

剣崎にカズマは訊かれた。

「いや、俺はまだ仕事があるんで」

と答えると。

「それは烏丸に頼めばいいだろ」

と、何故か相川が言った。烏丸さん・・・もしかして、前回のつて・・・。

「とくにくか〜く〜っ！何で社長室でトランプしてるんだよ！さっきから突っ込みもうと思ってたけどさ！？それは食堂か待合室でやって来い！」

我慢出来なくなり、遂にカズマは突っ込んでしまった。

先程から突っ込んでいなかったのは、もうこの人達に突っ込んでも何も無い・・・と諦めていたが、突っ込みの性は抜けず、突っ込みは突っ込みでしかなかった。

「地の文！何言ってるんだ！」

あらら・・・こちらまで突っ込まれました。

「ナニイテンダカズマ！」

「剣崎さんこそ何言ってるんですか！」

遂に突っ込みとボケが入り混じるといふ事になってしまった。

「・・・カズマ・・・剣崎・・・相川・・・」

何時の間にか、ルルが立っていた。

何故指名がカズマと剣崎と始なのかというと、カズマは優しいから懐いて、ほか二人は人間ではないから懐かれていると言う意味不明な事だった（ちなみにこれについては仮面ライダーとある世界にいていずれ明かすつもりです）。

「あ、ルル。どうしたんだ？」

カズマはルルを快く向かい入れる。

「ZECTの・・・天道と・・・ソウジから・・・連絡・・・。加賀美に何とか言って・・・ZECTのトップに・・・スキーに行く事を許された・・・というか・・・仮面ライダーの・・・スキー大会を・・・するらしい・・・。だから、剣崎とか、カズマとか、相川とかも呼んで来いって・・・。ちなみに、優勝商品は、何か願い事を一つ叶えて貰えるかもだって・・・」

「「「「やる!!!!」「」「」」」

5人はそう言ったとか。

（俺は、突っ込みという立場から逃れるんだ！）

（ララに・・・もう振り回されたくない！あの二人にも！）

（むかつく俺のイメージに罰を与える！）

（あ、橘さんそれいいですね！カズマさんも、きつとそれを望んでるはずですよ！）

(天音ちゃんの・・・幸せのために・・・!)

5人は、それぞれ自分の願いを叶える為に立ち上がった。

「……………とりあえず……………カズマ……………。その願いは叶わな
いかも……………」

「なんだとっ!?!」

一人は、すでに崩れたが。

「レディースあんじょ……………アンドじえんちょ……………ジエントル
ミエーン!」

物凄い噛み噛みの司会は、ララである。

今更滑舌が悪いという設定が生かされた。

「今から、ドキッ!仮面ライダーならスキーくらいできるでしょほ
らやりなちゃい大会!はっじまるよー!……………!……………!……………!……………!……………!……………」

ララはかみながらも元気よく言った。

「司会は私、鈴海ララと」

「金銅ルン」

「実況は、えつと……………現在連載中。仮面ライダークロツカー……………始
まりの戦い……………から来ました。下樹^{しもきゆまき}雪人です」

「僕も遅くなつてごめん。レンさんがね」

「二人とも、何故その人……」

流石オリジとリイマジ……とカズマは思った。

「あれ？ララは……」

シンジがカズマに訊くと

「あ、ララはあそこで司会」

「知らない奴も居るな」

そんなこんなで、スキー大会は始まった。

続く

十三話「カズマの過去：雪人は突っ込み」（前書き）

花苗「雪人君のポジションは決定したみたいね」

雪人「突っ込みか・・・」

カズマ「今回は、作者が勝手に作った俺とかユウスケの過去を話すよ」

ユウスケ「え」

十三話「カズマの過去：雪人は突っ込み」

「では、最初は、小野寺ユウスケと五代雄介のタッグです！」

ララは、元気なアナウンスで言う。

「へえ・・・タッグなんだ・・・」

「いやいや蕾さん、普通スキーにタッグなんてありませんから！」

ララの言葉に納得する花苗に、突っ込む雪人。

「見ていて『ありがちな言葉はやめるよな!?!』」

五代の言葉を遮ってアクアが叫ぶ。

「じゃあ、あねさん！見ててください！」

「頑張つてね、ユウスケ」

(一本違つと・・・カップルなんだけどな、この二人)

ユウスケとあねさんこと八代藍の二人を見て、カズマは思う。

「じゃあ、スタート！」

「そういえばこれレースじゃないの!?!」

『其処には突っ込むな!』

話そうとした雪人が言葉を遮られ、少し怒る（というより突っ込む）。

「良いじゃないですか。もう終わった事ですし」

雪人の営業スマイルがその場の全員に炸裂。

この子の笑顔天使や状態であった。

カズマも、こんな表情したら可愛いんだろっな〜とシンジと城戸と剣崎と橘は思いふけていた。

「カズマ・・・暇・・・」

前回の四人とルルが、社長室に（勝手に）持ってきたコタツの中でトランプをしていた。

「だ〜か〜ら〜な〜・・・はあ・・・。で、ルル、何してもらいたいんだ？」

「カズマの・・・過去が訊きたい・・・」

「はあ？」

ルルの突拍子な言葉に思わずカズマは言った。

「あ、俺も、カズマは中学生からしか俺も知らないから」

「お前の保育園生の時とかはどうだったんだ？」

「ユウスケさんとかと幼馴染なんですよね？どうなんですか？」

「えっと・・・じゃあ・・・話すよ・・・」

遂に折れたカズマは、過去の事を話した。

俺はユウスケやシンジと同じ保育園だったんだ。これは知ってるよな？

ルル「うんうん」

で、その時の事を少し話す。

「カズマ」

「カズマ！」

「なに？ユウスケくんにシンジくん」

俺は、ユウスケやカズマより年上だったから、二人の面倒も俺が見てたんだ。親同士が知り合いだった事もあってな。

「カズマって、たよりない！」

ユウスケにはつきり言われた俺は、落胆した。

「ええっ!？」

「うんうん」

シンジも、ユウスケと同じ意見だったらしく、頷いていたんだ。

「そんな・・・ぼくもがんばってるよお！」

剣崎「この時の一人称はぼくだったのか」
そこについては何も言うな！

「だって・・・カズマって、おんなっぽいもん」

「うん、こえとか、みためとか、いろいろ・・・」

ルル「はつきり・・・言われたのか・・・」

ううっ・・・

「もうすこしおとこっっぽくするどりょくしろっ！」

ユウスケが言って、シンジも便乗して

「しろっ！」

って言ったんだ。

「ええっ」

それで、二人による俺を男っっぽくしよう計画が始まったんだ。

「まずひとつ！いちにんしょーはおれであること！」

シンジは俺に言った。

「え、えええ……」

「いいから!」

「は、はい!」

「じゃ、カズマれんしゅー」

シンジは俺に言った。

「えと、ぼく……じゃなくて、おれのなまえは、けんだてかじゅ・
」

「おとこであることそのに!えと、とかつまったりしない!ただで
さえカズマはおんなっぽいんだから!」

「ユウスケえ」

「……それは……まあ……誰でも……な……」

「俺も……最初会った時は女と間違えたからな……」

剣崎は当時の二人に同情し、橘はそう言っていた。

「で、その後、小学生の時なんだけど……」

「なあ、カズマ」

「何だ？シンジ俺に何か用でもあるのか？」

シンジが、俺に話しかけてきたんだ。

剣崎「この時にはもう普通の男喋りなんだな」

あの二人の指導のおかげでな・・・。

「ある男子が言ってたんだけどさ・・・カズマ、今度の劇で女装するの？」

「は？」

俺は、その時、何も知らなかったんだ。

「え、カズマ、知らないのか？」

「ああ、俺、初耳なんだけど・・・」

で、しばらくの沈黙。その後。

「それ言った奴誰だ・・・」

っていう事件とか・・・

中学生の時に

「剣崎さん、その人は？」

「ああ、俺の先輩の橘さんだ」

「ああ、宜しく。で、剣崎、この人は・・・」

「橘さん、前話したじゃないですか」

「これ男なのか」

「っていう事件とか・・・」

「最後の・・・橘・・・」

「何だよ！俺的には傷ついたんだよ！」

「ってか、その劇って・・・役、何だったんだ？」

剣崎が訊いた。

「ロミオとジュリエット・・・」

全員、その時沈黙し・・・こう思った。

それ・・・中の人ネタ・・・。

続く

十三話「カズマの過去：雪人は突っ込み」（後書き）

シンジ「カズマって、よく中の人ネタ出るよな」

ユウスケ「あゝ、確かに」

ララ「そういえば、作者が朝言ってたんだけど・・・シンジ君の名前の由来が分かったかもだつて」

シンジ「どうということだ？」

ララ「シンジ君の苗字・・・辰巳っていうの・・・来年、辰年でしよ？」

ユウスケ「そうそう・・・ってあ！」

ララ「うん、作者が考えたの龍 辰 辰巳・・・っていう結論が」

シンジ「成る程！」

十四話「鬼! : フォルティは誰が装着できるか! ?」(前書き)

ユウスケ「題名…」

ルル「ユウスケ関係か…」

シンジ「何故! ?」

ララ「内容見ればわかる!」

ルル「ちなみに…今回から、台詞のところにも前書きます…」

ララ「わかりにくかったもんね」

十四話「鬼！：フォルティは誰が装着できるか！？」

カズマ「何してるんです？ 剣崎さん」

大急ぎの様子でBOARDに入ってきた剣崎を、カズマは不思議そうに見る。

剣崎は普段ならそんな大急ぎでBOARDには来ない。遅刻してきた社員でもあるまいし。

一真「ああ、カズマか…ちょっと、士という名の馬鹿がユウスケ激怒させたらしくてな…半径2kmには入らない様にしてるんだ…」

と、光写真館があるであろう場所あたりの直径4km地点では、士らしき人物が飛ばされていた。

カズマ「…大丈夫かなあ…」

カズマは、とりあえず士の心配をしておいた。

ユウスケ「つゝかゝさ」

士「すみませんすみませんもう二度としないんで許してください」

ユウスケは、士へのお仕置き劇場をしていた。

理由は、ユウスケがあねさんこと八代藍に送ろうとしていたプレゼントをぐちゃぐちゃにされ、前回のスキーで実は士の攻撃の巻き添えをくらっていて、色々士へのストレスが溜まっていたようだ。

ユウスケは、そこらへんに突き刺してある木刀を手にとって、土に先を向ける。

ユウスケ「二度と？一度もするなよ、ソウジさんか天道さんに頼んでハイクロして貰えよ、すぐにあれが戻ると思ってるのか？ああ？」

ララ（あちゃ〜、ユウスケ君…なんだか腹黒になっちゃってるよ…）

影からこっそりと見ていたララは、少々呆れていた。

ユウスケは、その後に、何処から取り出したのか、某鬼映画で使っていた武器を取り出す。

土「それ違う！それ華！確かにユウスケの中のっあああああああああああああ！…！」

ララ「南無阿弥陀仏…南無阿弥陀仏…」

と、ララはこっそりと土のご冥福を願っていたとか。

ルル「カズマ…ぶつちやけ聞くけど…」

カズマ「何だ？ルル」

ユウスケの土お仕置き劇場とほぼ同時刻、ルルは、カズマに質問していた。

ルル「ユウスケって…響鬼になれる気がするんだ…」

カズマ「ああ、それ、俺もなんか今思ったよ…」

一真「二人とも、俺には何を話してるかわからないから俺に説明してくれ！」

（説明中）

一真「成る程な…確かに、なれぎよあああああああ！！！」

カズマ「剣崎さん！」

ルル「剣崎！」

突然、剣崎に土が飛んで来た。

その後、送れてユウスケも鬼の形相で走ってくる。

ユウスケ「つかさゝ俺の怒りはこれつきりじゃ収まらないんだぞ！！！」

ユウスケは、先ほども使っていた某鬼映画の武器を土に構える。

ルル「もうやめろ！ユウスケ！それはもう響だ！」

カズマ「言うのかよ！？」

一真「実際、カズマの時も、麗羅とハツキリ言っていたからな…」

ルル「この二人は…中の人ネタで弄られやすい…」

士のお仕置き劇場パート2の後、ルルは、先ほど思った事をユウスケに言う。

ユウスケ「ふくん、じゃあ、アスムk「僕はここにいますよ！」なんでいるんだよ！」

ユウスケが、ルルが発案した今回の話を聞いて、アスムを呼び出そうとした所、何故かすでにアスムが居た。

カズマ「ああ、ソウジさん達との見学以来、何だか度々来るようになってな〜」

ワタル「ちなみに僕も居ますよ！」

翔太郎「俺も…」

フィリップ「響鬼か、興味深いね」

アスムに続いて、ワタル、翔太郎、フィリップも出て来る。

ララ「じゃあ、レッツ・トライ！ライダーモジュエーション！」

ルル「それ30分後の番組！」

ユウスケ達を追っかけてBOARDに来ていたスーパー天然年齢詐欺トラブルメーカーこと鈴海ララも居た。

ユウスケ「じゃあ、まずは本題のhib「まず最初はシンジ君にフォ

ルティを使ってもらいます！」それかよ！」

シンジ「ほい」

本題を無視して続けるララと、何故か居たシンジ。

シンジは、ルルからフォルティのキーベルトを貰うと、変身していた。

シンジ「変身！」

シンジは、仮面ライダーフォルティに変身していた。

ララ「成る程：シンジ君はクリア、と。あ、ユウスケ君とカズマ君と剣崎さんも」「やりません」「え」

三人に断固拒否されたララは、本題に入ることとした。

ララ「じゃあ、はい、アスム君」

ララは、アスムに言って、響鬼に変身する為に必要な物を持って来て貰った。

ユウスケ「でも、どうせ俺、変身できないぞ」

と言いつつ、ユウスケは変身する。

変身道具を開いて指に軽く叩く（叩くというよりも触れるという感じだろうか？）。

その時、ユウスケの周りを紫色の炎が包み、ユウスケはとりあえずアスムがしていたように炎を振り払った。

ユウスケ「え、ええ!？」

カズマ・シンジ・ルル・剣崎「……」
「本当に変身した!？」

ララ「成る程!華鬼だね!」

アスム「凄いです!ユウスケさん!」

ユウスケ「何で俺が!？」

ララ「だから華お!ララは少し自重して!」
「ふぁ〜いず」

BOARDは騒然としていた。

その時、シンジが爆弾発言をした。

シンジ「でもさ、ユウスケ、そのまま変身解いたら、駄目だよね。
響鬼に変身したら、確か服燃えるんだっけ?」

その場の辰巳以外全員「……」

ユウスケ「ぎゃ嗚呼ああああああああああああああああああああああ
ああs!?!」

十四話「鬼! : フォルティは誰が装着できるか! ?」(後書き)

ララ「前回に続いてリイマジの苗字これなんだ! のコーナーです」

ルル「そんなコーナーあったの! ?」

シンジ「前回からだね」

カズマ「で、今回は何だ?」

ララ「スバリ! 橘さんと上城さんのリイマジです」

カズマ「ムツキ」

シンジ「はいはい抑えて抑えて」

カズマ「サクヤ」

ルル「だからカズマ抑える!」

ララ「黒葉ムツキ、これは、レンゲルがクローバーのカテゴリーエ
ースの仮面ライダーである事から来てるでしょう」

ルル「クローバー、くろば、黒葉っていう事が」

ララ「たぶんね、あと、菱形サクヤさん」

シンジ「この人は…どういう事なんだ?」

カズマ「あ、確かに」

ルル「ギャレンは…ダイヤ…」

ララ「ダイヤって言ったら菱形!」

カズマ「シンジ」「成る程な!」

カズマ「俺やハジメは?」

ララ「ルル」「………」

シンジ「レンさんは?」

ララ「ルル」「………」

カズマ「シンジ」「なあ!」

ララ「じ、次回もお楽しみに」

カズマ「こら! 逃げるな!」

ルル「余談…作者は…カズマに燃やすぞと言わせたらしいです…」

「ララ、また風魔ネタ!?」

十五話「天然暴走注意報：Wブレイドの疲労」(前書き)

カズマ「タイトル・・・ララが何かするのか・・・」
シンジ「だな・・・」

ララ「前書きとかに出てくるのが安定してきた件について」

十五話「天然暴走注意報：Wブレイドの疲労」

これは、ある夕方のBOARDの社長室での出来事だった。

カズマ「剣崎さ〜ん・・・」

剣崎「何だ？カズマ」

明らかに疲れ果てているカズマに声を掛けられて、一真は尋ねる。

カズマ「黒葉の方のムツキと、菱形の方のサクヤとつちめて来て・・・」

剣崎「またあの二人が何かやらかしたのか・・・」

カズマは、昔からその二人に弄くられている。

その度に、オリジナルの二人が、「恥さらし」だの「貴方達が自分と同じライダーで同じ名前かと思うと反吐が出ますよ」だの言って制裁くらわしているが。

剣崎「っていうか・・・それは橘さんと上城の方の睦月に頼めよ」

カズマ「だったね〜剣崎さ〜ん・・・携帯〜」

カズマは一真に携帯を取るように頼む。

一真は、カズマの携帯を取って、カズマに言う。

剣崎「あのな〜、カズマ。俺はカズマの召使とかそんなんじゃないからね！」

カズマ「はいはい・・・えと・・・橘さん・・・上城さん・・・」

カズマはそう言って、携帯を弄り始める。

剣崎「つたく・・・」

一真は、そんなカズマに呆れつつも、カズマの机の書類を集める。

剣崎（ま、こいつも社長の仕事で疲れてるんだろうな。あの二人も、それを分かってやってくれればな・・・）

カズマ「あ、橘さん？うん、橘さんのリイマジがさ、うんうん、上城さんも居るって？あ、うん。で、黒葉と菱形がね、そうそう。ありがと。じゃあね」

カズマは、橘と電話して、丁度橘の近くに睦月も居たのか、カズマは二人にムツキとサクヤのやらかした事などを話、電話を切った。

剣崎「で、二人の反応は？」

カズマ「丁度近くにムツキとサクヤ居たみたいで、制裁しに行つたみたい」

カズマの言葉に、一真は「二人もいつもどおりだな・・・」と呟く。

ララ「ゲッモ〜ニン〜！はろはろ〜、鈴海ララですよ〜！カツズツマツく〜んっ！けっんっざっきっさ〜ん！」

ルル「カズマ・・・剣崎・・・こんばんわ・・・」

一真とララが追いかけてこをしてる横で、カズマを起こしたルルは
ルル「ねえ、カズマ。この会社の前の社長って、死んでるんだよな
？」

ルルは、カズマに四条ハジメの事を訊く。

カズマ「え、死んでないよ？ただ、ある日、四条さんに呼び出され
て、『もう、社長をするのに疲れた。剣立、お前に託す』とか言わ
れて、何か社長にされた」

剣崎「それ俺知らないぞ！」

一真の叫びに、カズマは

カズマ「うん、誰にも言っていなかったもん」

ララ「あ、だから墓参りしようかな〜って思ったけど、お墓何処に
あるか分からなかったんだ」

ルル「墓参りしようと思ったの!？」

今日も、平和である。

続く

十五話「天然暴走注意報：Wブレイドの疲労」(後書き)

やっつけすぎますWWW

十六話「クリスマスでも平常運行：プレゼント交換大会」(前書き)

ララ「ふ〜ふっふふふふ〜ふ〜ふ〜」

ルル「という事でクリスマス…」

矢人「今回はプレゼント交換か」

カズマ「嫌な予感しかしないけどな…」

十六話「クリスマスでも平常運行：プレゼント交換大会」

今日は、リア充にとっては天国。非リア充にとっては地獄の日…。
クリスマスだった。

ソウジ「　　」

剣崎「…はあ…」

此処は天堂屋。

非リア充の一人、剣崎一真はおでんを食べながら頂垂れていた。
この光景を天堂屋のおばあちゃんが見たらどう思うだろうか？とい
う疑問が浮かぶが、現在此処にはおばあちゃんは居ない。ソウジだ
けである。

ソウジ「どうしたんだ？剣崎…だっけな」

先程までクリスマスソングを歌っていたソウジは、頂垂れている剣
崎に話しかける。

剣崎「あゝソウジさん…。俺、どうすればいいんでしょうかね…」

ソウジ「ん？」

剣崎「橘さんは小夜子さんと一緒にディナー。始は天音ちゃんとか
と過ごしやすいし、睦月も何だか彼女と一緒にデートみたいでさ…」

ソウジ「他の二人はどうしたんだ？」

剣崎「広瀬さんと虎太郎はそれぞれ別のパーティーに呼ばれてます。俺も入れない輪の中なんで、此処でぼうつとすごしてるんですよ…」

ソウジ「そうか…。だがな、剣崎。これだけはいえる」

剣崎「はい？」

ソウジ「クリスマスは、本来イエス・キリストの誕生日を祝う日だから、本来家族等で凄くべき日なんだよ」

ソウジのその言葉を聞いた途端、剣崎は

剣崎「家族か…あははははは…」

乾いた笑いを始めた剣崎を見て、ソウジは「しまったな…」と思った。

その時、ソウジの携帯に連絡が入った。

ソウジ「すまない。もしもし。ああ、ララか…ふむ。ふ、楽しそうだな。偶然だが、此方には一名何すれば良いのか分からないと言ってる人物が居る。その人と一緒に来よう」

ソウジは電話を切って剣崎に言った。

ソウジ「剣崎、行くぞ」

剣崎「うえ？」

ソウジに突然肩を掴まれた剣崎は、ソウジに無理矢理別の場所へ連れて行かれた。

歌星賢吾、城島ユウキ、鈴海ララ、鈴海ルル、歌野失人、小原、金銅ルン、金銅ロン。
の計65人である。

ララ「じゃあ、ご飯は後にして、プレゼントこうかーん！」

ルン「…じゃあ、適当にリイマジとオリジ、分けてやろうか、第二期平成は僕達と一緒にするって…」

失人「じゃあ、ミュージックスタート！」

剣崎「え？ええ！？」

突然のプレゼント交換で、何も持ってきていない剣崎は困惑する。しかも、広瀬と虎太郎、始に天音ちゃんも居たことに驚いている。

ソウジ「大丈夫だ、プレゼントなら、さっきドサクサで買って来たからな」

ソウジは、そう言って剣崎に渡す。

剣崎「ソウジさん、あんたいい人だよ…」

ララ「ぶれぜんところかんっ！さあ、皆どうなったかな？」

オリジの場合（クウガ〜ディケイド）

城戸「何だこれ！？」 どうみても盗撮用カメラ

剣崎「うえ！？」 餃子w

始「…」 あからさまに天音ちゃんの書いた絵

天音「わ！これ始さんのだよね！やった〜」 可愛いシャーペン等文房具

剣崎（あれ…天音ちゃんに当たらなかったどうしたんだ…？）

乾「…」 凄いピンボケの写真

士「あ、それ俺のだな…で、俺に来たプレゼントは…なんだよこれ！」 ラブレター（笑）

海東「¥¥¥¥」 ちなみにプレゼントは灰（恐らく面倒臭かった乾巧の仕業）

夏海「…なんですかこのダサイTシャツ」 アロハ柄のTシャツ

明日夢「すみません…多分それヒビキさんです。僕のは…え？」
おでん

剣崎「ソウジさん…買ったんじゃないかって…作ったんじゃないですか！」

真理「マシなのでよかった…」 マフラー

士「ナツミカン…もう少しひねるよ…」

夏海「土君とか海東さんみたいなのを送る気はありません！」

ヒビキ「あゝ、これ少年のだね」 ノート

明日夢「すみません、これしかなくて」

五代「俺にあうというのが当たれば…あの人達の笑顔を守る事が出来たのに…」 手袋

津上「俺のは…何でしょうかね？」 笑顔を大切に！とか書かれた詩集

紅「あ、深央さんのかな？」 どう見ても婚約指輪

深央「¥¥¥¥¥」 ペンダント

大牙「弟よ…成長して！」 椎茸

良太郎「ええ！？」 箱だけで中身無し

デネブ「侑斗！」 王の判決を言い渡す！と書かれた紙

侑斗「何だよ！」 コーヒー豆の詰め合わせ

ハナ「あんの馬鹿タロス〜！」 何か色々入った意味不明なもの

以下省略

省かれた人たち「ええっ！？」

ララ「じゃあ、次はリイマジの人たちだよ〜！」

リイマジ

カズマ「あ、よかった。実は丁度寒かったんだよね〜」 おでん

シンジ「えっと…个性化的なプレゼントですね…」 柔道着の様なもの

レン「おい、これシンジのだろう」 どう見ても誰かへの愛をつづつたポエム集

アスム「これは…なんですか？新聞？」 レンの書いた記事集

ワタル「…これは、誰のでしょうか？」 純一スマイルのプリントされたグッズ

純一「良いプレゼントだな、感動的だな、だが無意味だ！」 アンデッドについて熱く語っている本

鎌田「ふふふ…って何だこれは！」 BOARDのパンフレット

ハジメ「（鎌田のは俺のだな…）これは…」 BORADの書類

ユウスケ「あ、これは…あねさんの…？」 酒

藍「多分、ユウスケのね…」 旅の日記みたいなもの

タクミ「あ、由里ちゃん…」 アルバム

由里「タクミ…」 ブレスレット

シヨウイチ「…何だこれ…」 制裁グッズ

ソウジ「シヨウイチのか…」 何故か曲がり難い鉄系ので作った模型

アラタ「何だこれは…」 おでん

弟切「おいアラタ…」 ガタツクゼクターとザビーゼクターとカブトゼクターの書いてある絵

マユ「あ、良かった」 マフラー

ソウジ「弟切…お前、普通なんだな（プレゼントが）…」

弟切「まさか兄妹揃っておでん持ってくるとは思わなかったがな！」

ララ「次は第二期平成と私達です！」

第二期平成（W〜フォーゼ）+ララ達

賢吾「これは…」 友達最高！と書いてある手拭い

映司「これって…何か、ねえ」 はやぶさ君のストラップ

弦太郎「これ賢吾のだろ！」 ビタミン剤

比奈「あ、映司君のかな？」 コアメダルとかアंकとか書かれたタオル

アंक「アイスクれ！」 帽子

失人「だからといって…これは…どう思う？」　アイス欲しいと書かれた紙

翔太郎「これは止めてくれ…」　真っ黒な料理（ちなみに箱が凍ってた）

フィリップ「おお！翔太郎、それ見せてくれ！今から誰が作ったか検索する！」　ハードボイルド命と書かれた色紙

ルル「…これって…普通…」　コート

ララ「ダンベル？」

ルン「うわっ！びちよびちよ…」　びちよびちよのネックレス

ロン「ルン、お前のは腐ってるぞ…」　腐った料理

ララ「一部の人ご愁傷様！」

ロン「お前のは水浸しだろ！」

ルル「えいつ！」　氷柱を飛ばす

ロン「ほっ！」　避ける

剣崎「痛っ！」　氷柱が当たった

ルル「剣崎！」

カズマ「まあまあ……とりあえず、飯食べようぜ、な？」

ルル「…分かった」

ハジメ「あいつ…俺に押し付けやがったな…orz」

続く

十六話「クリスマスでも平常運行・プレゼント交換大会」(後書き)

次回は食事編です

十七話「食事編! : ストレス?」(前書き)

カズマ「クリスマス、過ぎたよな?」

シンジ「まあ、作者の友達には今日の朝から「メリークリスマス!」

とか「あけましておめでとぅございます!」とか言われてたけどな」

カズマ「その友達の兄がな…」

シンジ「それは言っちゃ駄目だろ」

十七話「食事編! : ストレス?」

ルル「という事で、食事なんだけど…」

ルルは、パーティ会場で全員に話していた。

カズマは、目の前の料理に呆然としていた。

目の前の料理は…ある意味ロシアンルーレットだったからだ。

ララ「ドキドキ ロシアンルーレット食事会!」

ルル「ララの要望で…ロシアンルーレットになった…」

ララとルルの言葉に、全員

全員「オンドウルルラギッタンスカー!?!?!?!」

と叫んでいた。

ソウジ「大丈夫だ。中には俺が作った物もある」

カズマ「そうだよ、俺も手伝ったんだぜ」

総司「俺もだ」

その三人の言葉にシンジは

シンジ「助かった…もうWカブトが手伝わないと駄目だよ…」

とカズマを完全無視して言った。

カズマ「いや俺もある程度料理は出来るから！」

ルル「ちなみに…中には僕が作ったのもあるよ…」

その言葉に、数人、反応した者が居る。

シンジ（駄目だ。コイツの料理取ったら死ぬ）

カズマ（成る程な…ロシアンルーレットっていうのは、こいつこ事か）

士（この勝負。負けられないな）

ララ（ふふふ〜ルルの脅威に敗れなさい〜）

夏海（ルル君の料理、当たりませんように…）

映司（ルルの料理って、どんな感じなんだろう…？）

タクミ（早く総司さんとかソウジさんとかカズマさんとかララさんのとらなきゃ、僕達が死ぬ！）

そして、全員の戦いは始まったのである。

ちなみに、仮面ライダーじゃない人達は…。

真理「わあ！ララちゃんって料理上手なんだね！」

天音「おいしい！あ〜始さんもこの料理食べれたら良いのに」

藍「ユウスケ…大丈夫かしら？」

虎太郎「でもやっぱ牛乳がいいな」

広瀬「本当に虎太郎って牛乳ばかりよね…」

ひより「天道は大丈夫なんだろうか？」

樹花「お兄ちゃんなら大丈夫だって！」

優衣「頑張ってるね」

デネブ「ふう。侑斗！椎茸ちゃんと食べてね」 椎茸大量の料理
を実は作っていた

コハナ「大丈夫かしら…良太郎」

由里「タクミ…」

マユ「お兄ちゃん…」

アング「おい！アイスくれ！」

比奈「映司くん！頑張ってるね！この後知世子さんと一緒に二次会
するけど…」

賢吾「弦…太朗…頑張ってる…くれ…」

ユウキ「賢吾君！あ、弦ちゃん！生きて帰ってるね！」

明日夢「ヒビキさん、鍛えてるから大丈夫ですよね？」

小原「あはは。楽しそうだな」

和んでいる人達の横で、自己犠牲で済まそうとしている人が数人。

始「天音ちゃんが無事なら…俺はそれで良い…」

剣崎「大丈夫だ…広瀬さんと虎太郎が無事なら…」

五代「あの人達の笑顔を守れるなら、俺だって逝きます！」

ユウスケ「どうせ俺の思いはあねさんに届かないんだ…」

失人「大丈夫だよ…母さん。母さんの思いは無駄にしないって、決めたんだからさ」

鎌田「俺は関係ないああそうだ」 仮面ライダーじゃない人組に入ろうとする

ハジメ「ああ」 上に同じく

カズマ「一人ネタバレ発言はやめろ！あと五代さん逝くな！剣崎さんも自己犠牲にしないでください！それに始さんあんたが居なくなったら天音ちゃん悲しむでしょう！小原さんは何でこんな状況で笑ってられるんですかああもう何で小原さんは部外者なんだ！あと鎌田に元社長！貴方達も一応仮面ライダーでしょう！夏海ちゃん見習ってください！」

ルル「カズマ本当に生粋の突っ込みだ！」

シンジ「あいつかなり疲労してんだろうな」

カズマのガトリング突っ込みに驚くルルト、正月はあいつ休ませよう…と思ったシンジが居た。

そして、すでに被害者が出てしまった。

良太郎「ゴボゴボゴボ…」

コハナ「良太郎！」

はずれ料理（調理した人：小原）を食べてしまった良太郎が即急に倒れてしまったのである。

全員（小原さんあなたも料理できないんですか…！）

それを見た全員はそう思っていた。

小原は普通に作るうと思えば作れるが、時々遊び心が暴走してたまに人が食べられない料理を作ってしまうのだ。

普通の料理しか知らなかった剣崎がこの人に料理を頼んだのである。正直言つて、剣崎。タイミングが悪かった。

剣崎「地の分てめえ！」

城戸「剣崎さんどうしたんですか!？」

シンジ「来年は辰年…そして来年は龍騎一周年…。みんな…これどう思っ?」

カズマ「まさか…」

シンジ「来年は、俺か城戸さんには逆らえないね」
居た翔太郎蹴る

翔太郎「ぐぼあっ！」

タクミ「シンジさん酔ってます!?!」

シンジの唐突なSプレイにより翔太郎撃沈。そしてルルの作った料理によりシンジが暴走。

ルル「僕のした事にはちゃんと落とし前をつける…凍っつけ！」

暴走するシンジを止めたのはルル。被害が出る前に準備していたのである。

ちなみに、現在シンジは氷漬け状態である。正直言って後が怖い…だが、ルルなのでシンジは叱るくらいしか出来ないでしょう。

ララ「じゃあ、次の被害者は？」

そうララが言った途端、倒れた人物が居た。

何故か紛れ込んでいた湊ミハルがルルの料理を食べて撃沈していたのだ。

映司「何で!?!」

ララ「全くキャラが分からないけど出したくてたまらなくて出しちゃった人ですね」

映司「てか、何で出した作者！」

ソウジ「小原：お前、食べ物で遊ぶなって…何回言ったか？」
小原の料理食べた（正気です）

小原「あはは…」

総司「樹花〜！ひより〜！俺が居るから大丈夫だ〜！」
酔った人ユウスケ
に吞まされた

ひより「天道！？」

樹花「お兄ちゃん！何があったの！？」

シンジ「…」
氷漬け状態

カズマ「シンジい…お前は、勇者だよ…」

始「これで…よかったんだ…ガハッ！」
大量吐血

城戸「あはは…たのしー…」
気絶

剣崎「…おーはーらー…すーずーみー…」

ルル・ララ「あ。やば」「逃げる

小原「あれ？ララちゃん、ルルクくん？」

剣崎「さあ、こっち来い…」

小原「ははは…」

小原は、剣崎に締められましたとき。

小原「るるくんやららちゃんもどつざつぎゃああああああああ
ああああああ…！」

剣崎「ごちゃごちゃしないでこれでもくらえっ！」

ルル「流石ジョーカー…」

ルルは、その光景を呆然と見ていたとか

士「おいしいな…」

夏海「あの光景さえなければですがね…」

ユウスケ「…大丈夫かな？シンジとか、総司さんとか…」

海東「小原の最期も気になるがね…」

カズマ「シンジい…」

五代「守れなかった…あの人達の笑顔を…」

津上「せめて俺も作っていれば…！」

乾巧「これ…小原さんの料理だよ…？」

ヒビキ（日高）「それは当たり前だったんじゃないの？」

渡「深央さん、おいしいですね」

深央「そうですね」

大牙「渡う……」

ワタル「ブラコン」

アスム「ワタル、何言ってるんですか」

タクミ「あれ？草加さんは？」

由里「誰？」

シヨウイチ「あんなソウジ見た事無い……」

ロン「うわっ！びちょびちょ……ララの仕業ね……」

ロン「……」 ルルにより氷漬けシンジと同じ理由

ララ「剣崎君、ストレスがかなり溜まってたんだね」

ルル「だね……」

カズマ「恐らく8割くらいはララ達のせいだと思っけど……」

こうして、クリスマスパーティーは幕を閉じたのだった。

続く

十七話「食事編！：ストレス？」（後書き）

正月にカズマ休ませようかなは私の本音ですw

剣崎さんも結構溜まってるんですよ、特に前々回辺りの。

シンジ氷漬けは本来土でやるつもりでしたが土出番無いのに氷漬けは流石にやりすぎだと思ったので出番ありありのシンジで氷漬けしました。ロンはついでですw

十八話「昭和の人達登場（でも一部）：兄と弟？」（前書き）

城「遂に俺達の出番が来た！」

神「よっしゃ！」

筑波「まずは作者が何故か気に入ってる俺達三人の登場だ」

沖「俺は…orz」

隼人「頑張ろうぜ…いづれ、出番は来る」

風見「それまで、待ってるよ…」

風祭「ああ…」

南「というか…話題に出てるだけ良いだろ…」

本郷「真や光太郎は厳密的に言っていると昭和じゃなくて平成なんだがな

…」

麻生「あ、そうか」

瀬川「だな…」

十八話「昭和の人達登場(でも一部)：兄と弟？」

*今回はララ視点で話は進みます。

神「おりゃあっ！」

士「ぐはっ！」

これは、ある朝の出来事でした。

私が士君達の様子を見ようと光写真館に行った時、昭和ライダーの一人×こと神敬介君と、スカイライダーこと筑波洋君が士君に折檻を食らわせていました。

ララ「…どうしたの？敬介君…」

私は一応敬介君に話しかけてみました。何で『君』かって？だって皆さん本編開始時の年齢で此処に居るんですよ？大体私と同じくらいの年ですよ。

だって私は(一応)23歳なんですよ！

神「ああ、ララか…こいつが…なっ！」

筑波「ああ、そうだ…こんのくそもやしかな…」

洋君に至っては変身しようとしています。

ララ「駄目だよ、そんな事しちゃ」

士「たすか…グハアッ！」 神に蹴られる

私は一応止めておいた。まあ、ギャグですので人は死にませんがね？

筑波「だがな…」

ララ「そんな事じゃなくて、もっと残酷な方法で貶めよう！」

士「お前に期待していたのにな…！ぐはあっ！ゆう…す…す…燃えてる

ユウスケ「チツ外したか…」 もう一度人体発火しようとする

士「いやいやいや…外してねえ！俺に当たってた！だから人体発火するな！」 燃えてる

ユウスケ君も数話前の事がまだきてるのか、洋君と敬介君に加担しています。

ララ「それにしても…何したの？土君。よほどの事でもしない限り、こんな事はされないよね？」

私はとりあえず優しく土君に言う。

土君は口を開いてこう言った。

士「俺はただ…あいつ等に家族とか恋人居るのか？って聞いただけだ」

ララ「……………」

昭和の人達にそんな事聞くなんて、怖いもの知らずですね…。

話の途中で死んだ人はともかく…話の序盤や話が始まる前に死んでいる人は生き返らないという法則なのに…。

ララ「土君も、両親亡くしてるから分かるでしょうに…」

私はそれだけ言って、土君を足蹴にしました。

ララ「私だって両親亡くしてるし…」

苦しい思いをしたのは殆どの主人公や登場人物がそうなんですよ。昭和の人は特にそれが多いです。というより全員家族亡くしてると思いますよ？

土「分かったわかくはあつ！」　カッターナイフや氷柱が飛んでくる

土君がそう言ってる間にも攻撃は飛んできます。

ルル「ララを悲しませるな…」　カッターナイフと氷柱構え

どうやらルルも加担してたようですね。

筑波「よしルル。このままアイツ凍らせろ」

神「ついでにあの蜜柑もな」

ルル「了解」

そう言ってるルルは土君と丁度近くに居た夏海ちゃんは凍らされませんでした。

ララ「余計な一言が多いんだよ？土君達は」

神「よしよくやった」

筑波「このままハングライダーで飛び込んでやるつかあ？」

神「リア充なんて…！」

筑波「そつだそつだ！」

剣崎「その気持ち俺にも分かる！カズマなんて…カズマなんてえっ
！」

ルル「カズマは…結構もてるしな…」

ララ「りあじゅーって…何？っていうか…なんで剣崎君が…」

私はその会話についていきませんでした。
りあじゅーって…なんでしようね？

筑波「君は知らない方がよいよ」

神「そつだよ…特に茂には言わない方がよい…茂に言つと鬼神と化
すから…」

少々怯えた表情で敬介君は言う。

茂君…一体その言葉に何の恨みを持つてるんだろつ？

筑波「ボソツ（茂の恋人は死んでる前提なんだよ…あと、真にもこ
の事言うなよ？あいつも恋人っていうか…奥さん？亡くしてるから）

「
ララ「あ…うん、分かった」

茂君の恋人…岬ユリコさんだっけ？その人は死んでるんだ…私も初めて知りました。

真…というのは、風祭真さんですね。仮面ライダーシンの変身者。確か彼には奥さんが居たらしいんですが、なくなられてたみたいですね…。

子供居ると聞いてるんですが、男手一つって、忙しそうですね…。

城「よ、洋。敬介」

神「あ、茂じゃないか」

ルル（うわさをすれば何とやら…）

カズマ「けーんーざーきーざーんー！」

用事があったのか、カズマ君が剣崎君の所へ来る。
この場の数人の目がギランと光った。

城「…」

神「…」

筑波「…」 拳ゴキゴキ

剣崎「こんのリア充…！！！」

ララ「私達はおいとましましょうか、年末の大掃除もありますし……」
ルル「だね……」

ララ「あ、そうだ！茂君、敬介君、洋君。マリンチエリアに来る？
ご馳走するよ」

城・神・筑波「……ゴチになります」「……」

そう言つて、私達はこれから起こるであろう剣崎君精神的フルボッコ大会を無視して、マリンチエリアへ戻ったのでした。

続く

シンジ「うん、青春かな……？」

城戸「そうなのか……？」

十九話「今年は何があった？…大晦日大バトル！」（前書き）

カズマ「今年の更新もこれで終わりです！」

ララ「今年は色々あったね〜」

ルル「うん…じゃあ、どうぞ」

此処で年末パーティしようか？って話だったんだけど…。まだカズマとかきてなくて…。で、良いカメラの被写体になる人居ないかな？ってしてたら丁度青春カップルが居た」

タクミ「っていつか…その青春カップルってというのが恥ずかしいんですが…」

タクミはシンジの言葉に言う。

二人はリア充そのものだ。放って置いたら二人は悲惨な目に遭うであろう。

シンジはそれを分かっていたため丁度二人を見たあたりから見張っていたのだ。

これも幼馴染のよしみって奴だろう。

弦太朗「お！タクミに由里じゃねえか！と…シンジさんまで！」

タクミ（てか向こうからキターッ！）

シンジ「お、弦太朗じゃん」

由里「知り合いなんですか？」

由里がシンジに尋ねる。

シンジ「あれ？由里ちゃんもその場に居なかったっけ？何回か集まりとかで会っててさ…その時に」

由里「はあ…そういえば」

タクミ「で、あれ？弦太朗君さ…」

弦太朗「ん？」

タクミ「そっちから此処でイベントがあるらしい！って誘ってたんじゃないの？」

弦太朗「…」

弦太朗は覚えてないのか思い出そうと必死になる。

弦太朗「そうだった！」

シンジ「てかそれくらい記憶できるだろ…」

タクミ「そんな全員シンジさんほど記憶力は高くないですよ…」

シンジは報道員だ、記憶力は高くて当然だろう。城戸は別かもしれないが…。

城戸「お！シンジ！」

シンジ「あ、城戸さん」

城戸の存在に気付いたシンジは、走るようにして行ってしまった。

タクミ「あの二人は仲良いなあ…」

乾「よ」

タクミは振り返った先には、乾巧が居た。

タクミ「あ、乾さん。どうしたんですか？」

由里「あ、柄悪い人…」

弦太郎「不良キター！」

乾「…」 由里はともかく弦太郎に殺気を向けている

タクミ「まあまあ…抑えて抑えて」

タクミは怒りを発している乾に抑えるように言う。

カズマ「あ、タクミだ」

剣崎「乾も居るじゃん」

カズマと剣崎が来た。

その後ろにはなにやらぴつとり二人にくっついてる人物が居るが。

タクミ「剣崎さんにカズマさん」

乾「お前らか…」

剣崎「あのな…乾。お前ももう少し愛想よくしたほうが良いぞ。愛想よく無くても確かに結構もてたりとか…」

カズマ「剣崎さん…」

剣崎「お前は良いよな！恐らく三人にはもてるだろうしさ！」

カズマ「剣崎さんだつて広瀬さんとフラグあつたじゃないですか！」

剣崎「どうせ広瀬さんは虎太郎とくつつくだろ！」

カズマ「まだ分らないじゃないですか！つていうか俺なんて小学生の時に女に間違えられたんですよ！」

剣崎「身長高くても天井とか上のほうで頭ぶつけるしさ！」

カズマ「でも身長低いのも非モテ要素なんだよ！」

剣崎「じゃあ何で俺はもてないんだよ！」

シンジ「二人とも煩い」

城戸「黙っててくれないか？」

乾「というか…前回カズマは呆気無くやられてなかったか？」

カズマ「あれわざと」

ルル「……かじゅま…しんじい…たくみい…いにゆい…けんじやきい…きどお…」

シンジ「あ、何だ。二人の後ろに何がくつついてるのかな？つて思えばルルじゃん」

剣崎とカズマの後ろにはルルがくつついていた。
しかも眠たそうだ。

ソウジ「よ、今から此処で料理対決するんだが…一緒に来るか？」

タクミ「あ、ソウジさん。料理対決…ですか？」

ソウジ「ああそつだ。こっちにきてくれるか？」

全員「は…はい…」

ララ『という事で始まりました！料理対決！主催者および司会は私
鈴海ララ！』

全員「またお前かああああああああああああああああああああ
ああああああ！！！！」

今まで居ないと思ったララが登場。しかも主催者。これは全員突っ
込まずには居られないだろう。
だって、ララはこの世界で起こる事の殆どの元凶なのだから。

加賀美『実況は俺、加賀美新…』

芦河『何故か解説にされた芦河ショウイチです…』

ソウジ「アイツ…居ないと思ったら…」

恐らくララに巻き込まれたであろう二人が実況と解説だった。

アंक「煩くて悪かったな！」

映司と比奈に煩いと言われるアंक。多分ギャグ系では映司や比奈の方がアंकより権利はあるだろう。

ララ「じゃあ三組目はこの人達！最強タッグともいえるが喧嘩しそ
うだ！Wカブトの天道総司と天堂ソウジ！」

天道「くれぐれも、俺の足を引つ張るなよ」 22歳

ソウジ「俺のほうが年上なんだが？」 確か大体当時中の人31歳
くらい

ララ「あれ？早くも険悪ですね？」

加賀美「お前らまじめにしろ！」

ルル「じゃあ、次、四組目」

ララ「はい！次の組は……」

次の組を言おうとした途端、ララは固まる。

加賀美「どうしたんだ？えっと……次の組は……マジかよ……」

「……？」

加賀美「次の組はもやしと小原……」

シンジ「あれ無視！？えっと…まあ、カズマも居るし、大丈夫かな？」

士がブレイド勢の四人にフルボッコにされている間にララはシンジに意気込みを聞く。

シ『おおっと！カズマ選手期待されています！』

カズマ「俺に期待するの？シンジ」泣きそうな顔

シンジ「ああ、そっだ」真剣な顔

剣崎「なあ、俺も手伝っていいか？」

城戸「俺も…」

ララ『良いですよ！特に人数の原則は付いてませんし』

士「ユウスケ！」

ララの言葉を聞いた途端、すぐるように士はユウスケの名前を呼んだ。だが

ユウスケ「あゝ、士ごめん、俺もう五代さんと組んでるから」

五代「すみません」

士「ノーッ！」

ユウスケは既に五代と組んでいたためアウト

小原「失人君こっちに「行きませんよ。俺は津上さんと組んでるんで」失人で」

津上「失人君は結構料理できるみたいだったので組ませてもらいました」

小原が勧誘しようとしていた失人も津上さんと組んでいたため無理。

神「あ、茂」

城「お前もするのか？」

筑波「いや、止めとこう。これ以上場をカオスにはいけないな……」

城・神「「だな……」」

ララ『という事で…料理が出来ました！小原さん達はどんな風になってるでしょう！食べれる料理になってると良いですね！』

シンジ（とりあえずルルが参加してないだけ良い…）

とシンジは影で思っていた。

ルル『…じゃあ一番に発表するのは…士&小原の最凶タッグ…！』

「『おい漢字！！』」

加賀美『えっと…出てきたのは…あれ、意外に普通ですね…』

そつだ。士が出したのは意外に普通の料理だった。

海東「僕が居ればこれくらい簡単さ」

士達の所に居たのは海東だ。

どうやらギリギリの所で心配になったユウスケと夏海が海東を呼んでくれたらしい。

士の犠牲つきで

士「…」

海東「という事で…士、僕と一緒に愛の逃避行を！グホグハガアッ！」
見るに耐えられなくなったカズマ・ルル・シンジが殴った

夏海「海東さん！？」

カズマ「気持ち悪い！お前気持ち悪い！」

シンジ「そついうのは俺とレンさんだけがして良いことだ…」

ルル「…お前は生理的に受け付けない…」

海東「ああ…これが士だったらもっと気持ち良いのに…」

士「キモッ…」

小原「こんなの食べたら皆に細菌が感染するね。これは捨てておく
うか？それとも海東ホモに無理矢理注ぎ込む？」

士「注ぎ込め」

小原「了解」

ララ『じゃあ、次はカズマ君とシンジ君と城戸君と剣崎君のチーム
です！』

城戸「はい！」

剣崎「はい」

シンジ「これ自信作なんですよ」

カズマ「社員食堂で働いてた実力…見せてやる！」

それぞれ四人は別の物を出していた。

城戸は餃子。剣崎はラーメン。シンジも城戸と同じく餃子。カズマ
はチャーハン。

ララ『一応…統一性はありませんね…中華料理という統一性は…』

シヨウイチ『…っていつか何故年末に中華料理何だ！』

失人「…まあ、食べてみようぜ」

失人が食べるように言う。

天道「なっ！」

城戸の餃子を食べた天道は驚愕している。

ソウジ「どうしたんだ？」

天道「この餃子には勝てる気がしない……」

ララ『そついえば城戸君が餃子得意って公式設定だったね』

剣崎「俺達の料理も負けないぜ！」

小原「うん、まあ良いんじゃないかな？」

タクミ「流石カズマさんですね。昔の仕事上」

乾「辰巳：お前のは愛憎が詰まってないか？ある人物への」

シンジ「？」　ララから入手した包丁と手裏剣装備

乾「すまん！すまん！っていうかララ何持ってるんだ！」

ララ『あゝ何かラルの道具箱探ってたらあった』

タクミ「そのラルって人何者！？」

ララ『はい、じゃあ次は翔太郎君とフィリップ君！』

翔太郎「フィリップに怒られてハードボイル井は無くなった……」

フィリップ「僕が地球の本棚で調べたとおりに作ったから大丈夫だよ」

フィリップが出したのは普通の天井。

ルル『それでもどんぶりに行くの!?!』

翔太郎「それだけは譲れねえ!」

フィリップ「って翔太郎が言うから」

カズマ「まあでも、味は普通だし良いんじゃない?」

失人「だな」

フィリップ「まあ、普通のレピシ使ったからね」

ルル『次はユウスケと五代のペアだ…カレー…だな…』

そうだ。出てきたのはカレー。

ユウスケ「自信作ですよ!」

五代「はい、食べてください!」

剣崎「うまっ!」

カズマ「おいしい!」

シンジ「あ、これレンさんに食べてもらいたいかも」

城戸「蓮も来ればよかったのにな」

タクミ「何でオリジとリイマジで殆ど思考同じなんですか…」

天道「次だ！次こそは俺達の…！」

ソウジ「まあ落ち着け」

ララ『あ、うん！ソウジさんのおでんも食べたいしね！じゃあ次はソウジさんと天道君のペア！』

ルル（っていうか…ララっていつのまにそこら辺の人は苗字で君付けが定着したんだろう…？）

天道「俺達はこれだ」

そう言つて天道が出したのは案の定おでん。それと、何故か鯖味噌も付いている。

剣崎「多分…鯖味噌は天道さんの作った奴…」

カズマ「おでんの方が良い！」

天道「」

シヨウイチ『俺にもおでんくれー』

天道「」

シンジ「僕も！」

城戸「あ、ついでに俺も！」

天道「：orz」

加賀美「天道…後でお前の鯖味噌食べるよ…」

天道「：！」

ララ「次は比奈ちゃんと映司君（+アंक）のペアです！」

ルル「+あるからペアじゃないよね!？」

映司「これでも一応…」

比奈「まあ、知世子さんほどじゃないですけど…」

シンジ「ちょっと待って！後ろ！後ろでアंक（手）が鍋に突き刺さってる！」

全員比奈と映司の料理ではなく料理台の鍋に突き刺さっているアंक（手）に突っ込んでいた。

ちなみに料理は普通のピザとスパゲッティだ。

ソウジ「ふむ。まあまあだな」

ルル「流石映司…」

カズマ「あれ？ルルって映司に懐いてたっけ？」

十九話「今年は何があつた?…大晦日大バトル!」(後書き)

という事でこの小説は今年最後の更新となりました。

この小説も3000PVを迎えて、少しは自信がつかってきました。
来年もこの調子で頑張ります!

では、よいお年を…。

二十話「龍の年：新年ですよ」（前書き）

カズマ「ちよつとタイトル！」

シンジ「今年は僕と城戸さんに逆らえないよ」

城戸「え？」

剣崎「城戸はともかく辰巳が怖いな……」

二十話「龍の年：新年ですよ」

シンジ「ハッピーニューイヤ〜!〜!〜!」

城戸「あけましておめでと〜!〜!〜!」

剣崎「おめでと〜!」

カズマ「おめでと〜!〜!〜!」

ララ「あけおめ!〜ことよろ!」

矢人「略すな!あけましておめでと〜!〜!〜!」

ルル「おめでと〜!」

小原「ん?おめでと〜!」

タクミ「おめでと〜!〜!〜!」

由里「おめでと〜!〜!〜!」

ララ達はマリンチエリアで新年会をしていた。

シンジ「って言う事で、王様ゲームだあっ!」

辰以外全員「唐突だな(だね)!!!」

シンジ「ルールは知ってるよね？じゃあ棒はここにがあるから、引いてね。」

カズマ「シンジどうした」

小原「ちなみに王様は俺だよ」

ララ「あ、年のわりに40歳くらいに見えるらしい小原さん！」

小原「…orz」

失人「小原さああああんっ！」

小原「あはは…あのね…じゃあ…1番は…4番に愛の告白…」

タクミ「1番」

由里「／／／／」

失人（小原さん！？そしてピンポイント！？）

タクミ「あ、あの…由里ちゃん…」

由里「は、はいっ！」

タクミ「僕は…僕は、由里ちゃんがっ！すく」やめろおおおおお
！…！！』ええっ！？」

告白の途中で誰かの携帯が鳴った。

しかも着信音はタクミの名(迷?) 台詞

ララ「あ、ごめん私の…もしもし? ああソウジさん、え? ショウイチさんと陶子さんも居るって? ユウスケ君と藍さんも呼んで…ああ分かった。じゃあおでんとカレーも宜しく〜じゃね」

ララが電話に出た。どうやら相手はソウジのようだ。
というか何故着信音がタクミなのだろうか?

カズマ「 着信音自重! 」

ララ「ちなみにカズマ君からの『どこまで俺を馬鹿にするんだ!』で、シンジ君が『個人的な写真ですね』で、ソウジさんはさっきので、タクミ君のは『P i P i』で、剣崎さんのは『コレクツテモイイカナ?』で、城戸君のは『ローン!ローン!』だよ」

失人「何だか俺のが気になる…」

ルル「僕も…」

由里「なんでソウジさんのはタクミの言葉なの…? 」

タクミ「 遂には由里ちゃんまで会話に入ってきた! ? っていうか話分かってるし」

ララ「う〜ん、ソウジさんの迷台詞ってあったっけな? っで。ちなみに剣崎君で『オンドウルルラギツタンディスプレイ?』はメジャーすぎだし…タクミ君のは…オートバジン好きだから…」

シンジ「いや…ララは間違っている…」

ソウジ「…」 上に同じく

ユウスケ「…」 上に同じく

陶子「シヨウイチ?」

藍「ユウスケ?」

マユ「お兄ちゃん?」

ソウジ「ケーキを投げたのは誰だ…」

シンジ「…」 黙って小原を指差す

小原「ええっ!?俺!?!」

剣崎「…」 黙ってシンジを指差す

城戸「…」 恐怖に怯えている

その他全員「…」 恐怖に怯えた目で小原を指差す

ユウスケ「小原…こっちに来い…」 鬼神のような形相

神「あ、俺達も参加していい?」

筑波「俺も!」

城「リア充爆発しろリア充爆発しろリア充爆発しろリア充爆発しろ
…」

という事で、今年一年も、こんな感じで平常運行します。

ワタル「ふ〜、お茶がおいしいですね〜」

アスム「パーティに参加しなくて良かったですね!」

キバット『だな…（小原…頑張るんだ…）』

ワタル「それにしても…土さん達はどうしたんですか？」

アスム「あ〜、そういえば師匠と一緒に三人で初日の出見に行くって言っていましたよ。一昨日」

ワタル「遭難したんでしょうかね？」

アスム「師匠に限ってそれはありません!」

テレビ『本日午前8時、近くの山より12月31日より行方不明になつていた門矢士、海東大樹、光夏海が発見されました。門矢氏の妹によると、「ナマコという名の海東大樹が二人を道連れにして嘘の案内をした』と証言。警察は、海東大樹容疑者から事情聴取しようとして試みています』

ワタル「…」

アスム「…」

キバット『…』

ワタル「さて、ナマコ潰しに行きましようか」

アスム「やめてください！」

ワタル「ユウスケが断っていて良かったすね　　やっぱりナマコの事だからこうだと思いましたよ」

キバット「あゝ…王様モード発動…」

ワタル「キバット」　満面の笑み

キバット「は、はい！」

ワタル「一緒にナマコ潰しに行きましょうか」

キバット「…はい…」

続く

二十話「龍の年：新年ですよ」（後書き）

カズマ「ワタル怖い…」

シンジ「今回はオリジが殆ど出なかったね」

ララ「それは私が他の人呼ぼうとしたら…」

シンジ『あゝ、天道はハイパーゼクター強奪されて落ち込むし、五代さんは忙しいみたいだし、津上さんはレストランの経営だし、乾は真理ちゃんとデート（草加と啓太郎と木場の監視付き）だし、ヒビキさんはきつと遭難してる士達を発見してるだろうし、良太郎は不幸を加速させて入院中だし、渡はヴァイオリン製作に熱中してるし、土は遭難中だし、翔太郎とフィリップは工作中だし、映司は比奈ちゃんとデートだし、弦太郎はなでしこちゃんとデートだしさ』

ララ「って…」

剣崎「それって…」

シンジ「ん？」 満面の笑み

カズマ「…（分かった…剣崎さんと城戸さん以外のオリジは結構どうでも良いって事かな…）」

ララ「昨日はおばあちゃんの家に行ってきたよ！」

ルル「従兄弟と一緒に遊べて楽しかった…」

ララ「入学前の従兄弟が可愛くって！クラヒフォーゼしてたな…」

………「って…作者が」

ルル（小学6年女子がクラヒフォーゼ…）

二十一話「マンデッドの座談会・白井の恋愛フラグ（前編）」（前書き）

カズマ「今回は完全にオリジ剣の話だな…」

ララ「だね〜」

シンジ「でもマンデッドって事はララ達も出れるんじゃない？」

ララ「ふえ？」

二十一話「アンデッドの座談会…白井の恋愛フラグ（前編）」

みゆき「あ、白井さん！」

虎太郎「みゆきさん！」

吉永みゆきは白井虎太郎を見つけて追いかける。

彼女はアンデッドだ。だがこの世界ではそういう怪物だ何だはどうでも良い事になっている。

因みに此処では恐らく封印される直前辺りの関係等になっている為、虎太郎はみゆきに襲われている過去がある事になっている。

だが、此処ではその後には和解決した事になっている。

現在は二人は買い物物の約束をしていて今から買い物という事になっている。

みゆき「それにしても…白井さんから買い物しようって言われるとは思ってませんでした。何で私なんかと？」

虎太郎「えっと…なんか、みゆきさんと一緒に良いから…かな？ 剣崎君も広瀬さんも何かどっか出かけてたし、嶋さんも橘さんと何かしてるし。それに何だかみゆきさんに会いたくなっちゃって」

みゆき「そんな…私なんかで…よければ」

因みにこの光景は紛れも無くカップルであり、非リア充の人達にとっては抹殺対象となるであろう。

だがそんな事をした暁にはみゆきがアンデッドの力でそいつらを捻じ伏せるか剣崎や広瀬…そして何故か剣立の方のカズマや辰巳シンジや鈴海ルルまで加勢に来るといいう事になるので非リア充はあの二

人を標的にしない。

*二人の買物物は作者が妄想している時点で甘々になってしまった為割愛します。

一方、剣崎は変な集まりに招待されていた。

剣崎「何だ…？この集まり」

剣崎が疑問に思っていると相川が

相川「何って…アンデッド同士の集まりらしい…尤も、数人欠席だが」

相川の言った欠席者には当然現在虎太郎とデートしているみゆきも入るであろう。

ララ「だから私達も居るよ！」

ルル「不本意ながら…」

失人「二人のお守りです…」

ララとルル、そして何故か失人も居た。

剣崎「そういえば二人も一応アンデッドなんだったけな…？」

????「剣崎さん…」

そこで、剣崎に話しかける人物が居た。

剣崎は此処にはアンデッドしか居ないと（失人はあえて無視する事とした）思っていた剣崎は溜息混じりに答えながら振り向く。

剣崎「はあ…今度は誰が…」

カズマ「何か嶋さんと橘さんと相川さんに拉致られて来たと思えば…アンデッドばっか…」

剣崎「アンデッドですらないだろ！本当に！」

其処には剣立カズマが居た。

橘「いや〜アンデッド候補だからな」

剣崎「ダディヤアナザンナズエイルンデイス！！??」

其処には何故か橘も居て何だかカオスになっている。

カズマ「俺はアンデッド候補じゃない！ちゃんと血は赤だあっ！！」

ララ「でもどっかのカズマ君の防御力はアンデッド超え…」てないし！此処の俺じゃ無理だもん！」 カズマ

叫ぶカズマとララの天然（というよりフリーダム？）がぶつかる。

純「良い突っ込みだ、感動的だな、だが無意味だ。そして煩いな」

という純一に全員。

虎太郎「あ、はい…そうですね」

みゆきは虎太郎を遊園地に誘った。

みゆき（白井さんを遊園地に誘えた…！）

みゆきは思わず虎太郎の手を引いて走っていた。

みゆき「行きますよ！」

虎太郎「…はい！」

虎太郎はみゆきの言葉に明るく返事をしていた。

みゆき「うわ…！…いっぱい乗り物がありますね！」

虎太郎「そうですね。何から乗りますか？」

みゆき「うん…！白井さんの好きな乗り物で」

そのふとしたみゆきの笑顔に虎太郎はドキドキしていた。

虎太郎（み、みゆきさん…！／／／）

みゆき「白井さん、どうしたんですか？顔赤いですよ？」

そう言って、みゆきは虎太郎の額を触る。

虎太郎「だ、大丈夫です／／／」

虎太郎は思わずペアで乗る乗り物を探してシューティングの乗り物を指差していた。

虎太郎「あ、あそこに行きましょう」

みゆき「そうですね！」（ふふ、笑顔作戦成功！白井さんったら照れちゃって）

実は、これはみゆきが狙ってしていた事である。

みゆきは虎太郎が買^{デート}い物の計画を立てていることを知っていて、少女漫画などを読みつくして作戦を練っていたのだ。

次回に続く！

二十一話「アンデッドの座談会・白井の恋愛フラゲ（前編）」（後書き）

剣崎「まさかの前後編!？」

カズマ「次回に続く:orz」

睦月「ですね:orz」

ララ「あれ?何か二人落ち込んでる?」

二十二話「アンデッドの座談会・白井の恋愛フラグ（後編）」（前書き）

剣崎「そういう意味での前後編あああああああああ！！

！！！！」

カズマ「という事は俺も上城睦月さんもアンデッドの中で……orz」

睦月「そんなあ……」

嶋「まあまあ、頑張れ」

烏丸「そうだな」

二十二話「アンデッドの座談会…白井の恋愛フラグ（後編）」

虎太郎「さて…みゆきさんはシューティングゲーム出来ますか？」

みゆき「多分…出来ると思います」

虎太郎とみゆきは遊園地のシューティングの乗り物に乗る事にした。二人は本当は付き合ってるのだろうと思うくらいに仲が良い。

まだ虎太郎もみゆきも正式に告白はしてないので恋人同士ではない。だがその光景はまるでカップルだ。

二人は剣崎達の苦勞などしらないだろう…。

剣崎「…はあ…」

剣崎はこの光景を見てどうしようか迷っていた。

カズマ「俺はアンデッドじゃない俺はアンデッドじゃない俺の血は赤だ俺の血は赤だ…」

睦月「…orz」

ララ「シャンパン Rocket！…！！！！」 シャンパン振りまくってからあける

ルル「ララ！それ危ない！」 ララの手を掴む

失人「ララ暴れるな！」

嶋「空気が悪いなあ…」

橘「ほら剣崎も睦月も剣立ももう少し楽しみ、コレクツテモイイかな？」
ルルの作った料理とは言えない物を食べながら

剣崎「美味しいんですか！？それ」

ララ「それ食べれるって挑戦者だね…」

カズマ「俺はアンデッド候補じゃない俺はAnd（以下略）」

睦月「……………orz」

ララ「睦月君とカズマ君が凄い事になってるね…」

失人「やっぱり俺達帰る…。アンデッドの中で一般人が居るって言うのは変なんだよ」

カズマ睦月失人以外全員「「いやいやいや…お前らも（一応）一般人じゃないといえは（一応）一般人じゃないからな！！！」」

三人「……………」

剣崎「てかさあ…もう弟切とか呼ばないか？アンデッドだけだと寂しいんだが…」

橘「それただ単にお前がアンデッドだけの集まりに居たくないだけ

だろ…」

剣崎が弟切にも来て欲しいと思った瞬間。

弟切「おい、ソウジからおでん貰ってきたんだが…ってどうしたんだ？」

全員「ナズエタイミングガイインディスオ、ドギリ、ザアン!？」

当人である弟切が居たのだ。何故こんなタイミングが良い。全員が擬似オンドウルになるくらいに。

しかも後ろから日下部ダイクカワト総司と紅渡とワタルとアスムと辰巳シンジと城戸真司と彼の持っている鏡の中にリュウガとシが見え隠れしている。

シンジ「ちなみに僕達は人間だよ」

城戸「でも何処かの辰巳は人外の気が…」

アスム「それは何処かのカズマさんや城戸さんでも一緒です」

ワタル「僕は元々人外ですよ」

日下部「何だか弟切に呼ばれた」

紅「ワタルに連れてこられました…（ほぼ強引）」

何だか集会場ががやがやしていくに連れて…。

ト 剣崎「何だか…おでん屋の方のソウジカワトさんと警察の方のシヨウイアギチ

さん呼びたい気分になってきた…」

カズマ「俺も…」

Wブレイドは途方に暮れていた。

虎太郎「いや〜楽しかったですね。みゆきさん」

みゆき「そうですね。あの…白井さん」

虎太郎「はい。何でしょうか…」

みゆき「あの、私と…付き合ってください!」

虎太郎「みゆきさん…」

遂にみゆきは言った。

虎太郎はみゆきの顔を見る。その表情は赤く、とても真剣だった。

虎太郎「良いですよ。僕も、みゆきさんの事が好きです」

みゆき「///」

虎太郎「///」

無事、みゆきと虎太郎の恋は実った。

広瀬「うん、頑張った虎太郎！」

天音「虎太郎にしてはやるじゃない」

影から二名ほど観客が居たが。

続く

二十二話「アンデッドの座談会…白井の恋愛フラグ（後編）」（後書き）

カズマ「最後甘っ！甘すぎるー！」

シンジ「作者も「何だこの甘さは…！」と驚いてたしな」

ルル「カズマの血のいろはなんだ！」

カズマ「（まだ）赤だ！」

シンジ「でもまだ…て事は…」

ルル「いずれ…」

カズマ「しまったああああああああああああああああああああ
！！！！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8328y/>

ライダーの世界がもしも一つだったら～ライダーワールド～

2012年1月14日12時45分発行